

2-4. 豊田市

No.	4	豊田市
-----	---	-----

1. 取組の全体像						
1. 自治体の概要						
①	自治体名	豊田市		②	担当部局名	福祉部 よりそい支援課
③	人口	414,502 人<令和7年1月1日時点>				
④	自治体内連携	庁内連携部局(メイン)		福祉部 よりそい支援課		
			庁内連携内 ※会議体、情報共有	よりそい支援課が中心となって複合的な課題を抱える住民の状況や相談内容を把握し、庁内外で積極的な情報共有を実施		
		庁内連携部局(メンバー)		福祉部のほかの課、こども・若者部、保健部、地域振興部、生涯活躍部、美術・博物館(重層定例会に参加する課)		
			庁内連携内容 ※会議体、情報共有	誰もが孤独・孤立になり得ることへの理解を深め、全庁的に孤独・孤立の視点を取り入れて住民と接する意識を醸成し、情報共有を実施		
2. 形成をめざす地方版連携PFの姿						
①	従前の取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	- 複合的な支援を必要とする対象者に向けた包括的相談事業、アウトリーチ等を通じた継続的支援事業、多機関協働事業、参加支援事業、地域づくり事業を、重層的支援体制整備事業として令和3年度から実施している。 - 令和5年度には「地域共生社会推進全国サミット in とよた」において、「地域共生社会推進全国サミットとよた宣言」として、『おたがいさま』と言えるコミュニティ、つまり『人や活動、地域などのつながり合い』を、新たな形で取り戻すこと」を提唱した。 「企業城下町」である豊田市には、身寄りを頼ることができない人が多く、そうした人への支援に向けて支援時のコツやノウハウなどをとりまとめた「支援のレシピ集」を作成した。				
②	実現したい状態 ※構築する仕組み/支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール		(対市民)特に①潜在的な対象者の支援に向けて、「孤独・孤立」についてまずは市民に広く知ってもらうこと(+②市民が孤独・孤立について理解している状態を目指す第一歩としても、カードゲームを活用した広報を行う) (PF内)これまで「空想ファクトリー」やその前身の勉強会の場で、流動的につながってきた関係者・住民に対して、PFというまとまり意識を持ってもらうことで孤独・孤立対策における一層の活動連携を促進すること (庁内)福祉部に限らず全庁で「つなぐるCredo(孤独・孤立対策の考え方)」を通した、孤独・孤立の問題や取り組むべき姿勢などについて共通認識を持つこと		
		最終的なゴール		③孤独・孤立を含む支援を必要とする人に対しては支援が継続的・長期的に行われる状態を、①に対しては「多様なつながり」を自由に選択できる状態を目指す(③については主に重層事業で、①については孤独・孤立対策として取り組む) ②市民の孤独・孤立に対する理解を醸成し、①③への支援に役立てるため、「豊田市民みんなが『孤独・孤立』に対する理解を深めている状態」を目指す		

3. 地方版連携PFにおける連携体制			
①	地方版連携PF	立ち上げ年度	令和6年度
		参画メンバー	地域の「つながりづくり」に取り組む「とよた多世代参加支援プロジェクト」等を中心に据える。
		選出・打診時の工夫	「つながりづくり」に取り組む団体や重層関係の団体をコアに据えつつ、それ以外の団体も広く参加してもらえるように、PFは会員制をとらず、参加したいと思った人が自由に出入りできるように設計。
②	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	立ち上げ年度	未定(地域協議会を独立させて設置はしないが、会議の場として「支援会議定例会」を活用予定。詳細は後述)
		参画メンバー	重層の「支援会議定例会」参加団体(※参加者の詳細は、次ページの図の通り)
		選出・打診時の工夫	地域協議会／「支援会議定例会」という2つの会議体の重複を避ける。定期的な事業報告に加えて、必要なときに「支援会議定例会」にて孤独・孤立を1つの議題として扱うことで、実質的には「支援会議定例会」が地域協議会の役割を果たす。

4. PF連携による価値や工夫_考え方	
・	重層の「支援会議定例会」と、市内で月例開催される「空想ファクトリー」という市民同士の勉強・交流の場(市内の活動団体関係者や一般市民が集い、地域をよくするためのディスカッションや交流を行う場)の参加者・運営者を中心に据え、PFは会員制をとらないゆやかな形をとる。
・	上記により、必要なときに関係する団体がつながれるようにし、なおかつ日常では各自が「孤独・孤立」という観点を意識して、住民の見守りやそのほかの活動を行ってもらうために、PFという枠組みを位置づける。
・	「地域のために何かしたい」と日々考えている住民もPFの一員にもなり得るという考え方から、メンバーが流動的に出入りするPFである点を生かして、住民もPFの一員として参加することが可能なPFの設計とする。そのためにも住民自身が、孤独・孤立に対する基礎理解を深めていくことは重要であり、今年度は孤独・孤立について全く知らない市民が楽しく学んでもらうためのツール(=カードゲーム)を通した啓発を行う。

(※参考)令和6年度 豊田市重層的支援会議定例会 関係機関一覧

主として個別支援に関する所属			
福祉部	よりそい支援課	管理職級	課長
			副課長
		主査監	主査監
			担当長
		担当者級	担当長
			主事
	生活福祉課	管理職級	副課長
		担当者級	主査
	障がい福祉課	管理職級	副課長
		担当者級	主査
	高齢福祉課	管理職級	副課長
		担当者級	担当長
こども・若者部	こども・若者政策課	管理職級	副課長
		担当者級	主事
	こども家庭課	管理職級	副課長
		担当者級	主査
保健部	保健支援課	管理職級	副課長
		担当者級	担当長
教育委員会	パルクとよた	管理職級	指導主事
		担当者級	スクールソーシャルワーカー

主としてつながり合い創出を含む地域づくりに関する所属			
福祉部	地域包括ケア企画課	管理職級	副課長
		担当者級	主査
こども・若者部	保育課	管理職級	副課長
		担当者級	担当長
保健部	健康づくり応援課	管理職級	副課長
		担当者級	担当長
地域振興部	地域支援課	管理職級	副課長
生涯活躍部	市民活躍支援課	管理職級	副課長
美術・博物部		管理職級	館長

その他必要な支援機関等			
社会福祉協議会	共生推進課	管理職級	副課長
		担当者級	出張所長
	くらし応援課	管理職級	副課長 成年後見支援センター長
とよた多世代参加支援プロジェクト（から2名）		—	—
		—	—
消防本部	（北）管理課	担当者級	担当長
		担当者級	消防士長

2. 連携PFイメージ

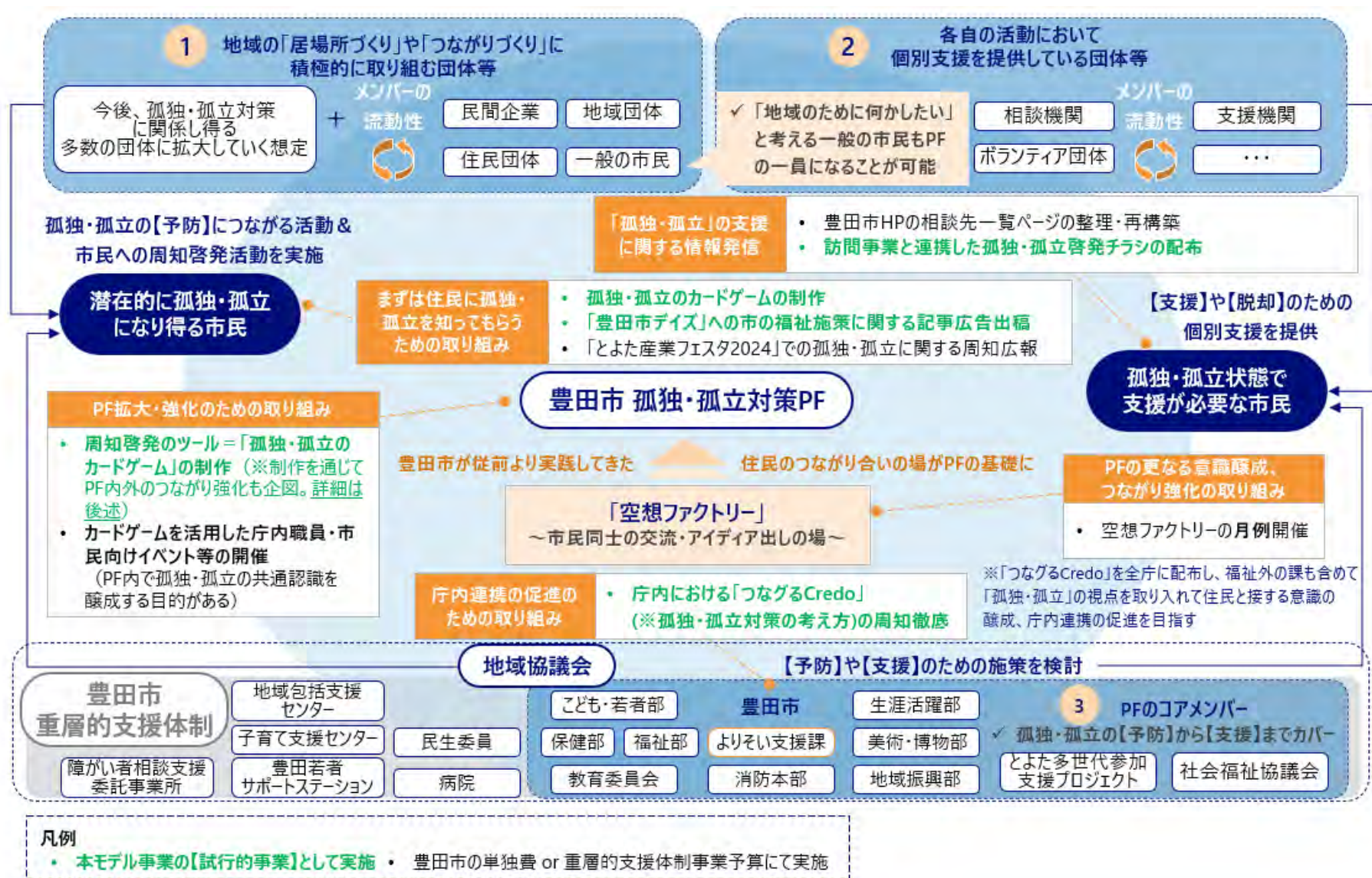
5. 連携PFのイメージ図



凡例

- ← プレイヤー間の連携内容や情報のやり取りなど
- ✓ 各プレイヤーの活動趣旨、内容など

【参考資料】今年度の豊田市の取組み(本モデル事業の試行的事業含む)とPFの関係



3. 試行的事業一覧					
6. 本年度に取り組む試行的事業の概要					
試行的事業のポイント・工夫		孤独・孤立対策を「支援」と「予防」に分け、「支援」は重層的支援体制の中で抜け漏れなく支援を強化することを目指す。一方で主に孤独・孤立の「予防」に資する取り組みの手始めとして、試行的事業にて市民向けの周知啓発を中心に実施する。			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
①	職員の理解促進と庁内連携促進のための広報物作成	全庁的に各課が各自の業務に孤独・孤立対策の視点を入れて、個別課題の解決とともに孤独・孤立の解消に取り組むことを推進するため、豊田市の孤独・孤立対策基本方針の心構えを記載した「つなぐるCredo」を作成し、全職員に配布した。	「つなぐるCredo」を全職員に配布することで、孤独・孤立に対する豊田市職員の基礎的な理解力を底上げし、分野をまたいで全庁的に孤独・孤立対策に取り組むことの重要性を認識してもらうこと	- デザイン・印刷：1月中 - 配布時期：2月上旬の庁内の部長会議にて配布・説明	デザイン、印刷：株式会社こいけやクリエイト（約40万円）
			成果検証結果	✓ 全職員 6,200 名に配布・携帯を依頼した ✓ 福祉分野外の職員にも孤独・孤立について理解してもらうきっかけや、普段の業務に孤独・孤立対策の観点を取り入れてもらうきっかけとなった	
②	孤独・孤立に関する理解促進ツールの企画・制作	- 孤独・孤立に関する理解を促進するためのツールとして、老若男女が楽しみながら孤独・孤立について学ぶことができる「孤独・孤立の当事者体験カードゲーム」(名称:「コドクエ」)を制作した。 - 豊田市よりそい支援課、当事者支援団体に知見を持つ合同会社なんつな(共同制作者)、そのほか地域の福祉関係者へのヒアリングを通じて、カードゲームによって住民にどのようなメッセージを伝えていくか整理した。今年度はまず、その結果を反映させたカードゲームの試作品を作成し、一般の市民を含む協力者との意見交換(複数回)やテストプレイを経て、ブラッシュアップした。	- だれでも孤独・孤立になる可能性があることを、カードゲームを用いて「楽しく」住民に知ってもらうこと。 - 制作過程で、孤独・孤立の問題に関する一層の理解や、今後アプローチしたい住民像への共通認識を深めること。	- 意見交換・テストプレイ：12月 - カードゲーム：2月末完成	カードゲーム制作：株式会社カヤック(約300万円)
			成果検証結果	✓ テストプレイを通して、参加者間で孤独・孤立の地域課題や、アプローチすべき住民像に関する共通認識が醸成された ✓ 意見交換会・テストプレイには各回およそ20人が参加した	

③	孤独・孤立に関する理解促進イベントの開催	・ 上記のカードゲームをツールとして、まず今年度は①職員向け研修、②市民向けの孤独・孤立に関する理解促進イベントを開催した。①②においては、実際に完成したカードゲームを用いて、孤独・孤立についての理解を深めてもらった。 ・ また、今後もカードゲームを用いた中長期の普及啓発活動を計画しており、来年度以降も③市民向け体験イベント、④中学校への出前講座などのイベントを開催する予定である。	・ 福祉分野以外の支援団体や地域関係者に、孤独・孤立の問題について認知してもらうこと。 ・ 地域の「つながりづくり」に今後取り組む市民を増やすこと、「つながりづくり」に資する活動が増えていること。(中長期的な目標)	・ 職員向け研修: 2月27日 ・ 市民向けイベント: 2月27日	イベントの開催費用等 (※本事業は、豊田市の単独費で実施した)
			成果検証結果	✓ 福祉分野外の職員も、孤独・孤立を知ってもらうきっかけとなった ✓ 参加した市民の約78%が「ゲームでのつながりづくりの体験を通して、つながり方の理解ができた」と回答した	
④	「豊田市デイズ」への記事広告出稿	・ 東海エリアを中心に販売されている雑誌である「豊田市デイズ」に、本モデル事業の試行的事業を含む、豊田市の孤独・孤立対策や福祉施策に関する記事広告を4ページ出稿した。 ・ その掲載内容を抜き刷りして、パンフレットとして10,000部印刷した。	・ 豊田市が現在実施している多数の福祉政策(孤独・孤立対策を含む)を、改めて棚卸すること。 ・ 市民に、「空想ファクトリー」という市民同士の交流・学び合いの場(=豊田市のPF)があることや、孤独・孤立について学べるカードゲームを作成したこと、市内にどのような支援先・相談先があるかを知ってもらうこと。	✓ 記事内容検討: ~1月 ✓ 抜き刷り印刷: 2月末 ✓ 雑誌の出版: 2月末	・ 記事作成・出稿、抜き刷り: 株式会社ネオパブリシティ(約50万円)
			成果検証結果	✓ 市民向けに、豊田市が現在実施している多数の福祉政策(孤独・孤立対策も含む)について、分かりやすく説明できた ✓ 記事を読んだ市内職員から、「豊田市なら安心して暮らせる」、「どんな悩みも相談できることがわかり安心できた」等の感想を得た	

⑤	孤独・孤立に関する普及啓発チラシ配布	- 市民向けの周知啓発のため、孤独・孤立による悩みに応じた豊田市内の相談機関を記載したチラシを作成した。 - 重層の「支援会議定例会」参加団体や市内の支援機関等に配布した。	一般の市民向けに、わかりやすく「孤独・孤立」という状態について伝え、支援が必要になったときに支援機関とつながることができるよう、豊田市内の支援先の情報等を集約して伝えること	✓ チラシの内容検討：12月 ✓ デザイン・印刷：1月 ✓ 訪問事業等での配布：2月以降	チラシのデザイン・印刷：株式会社こいけやクリエイト(約10万円)
			成果検証結果	✓ 市内の支援機関 2 箇所に各 100 部設置・配布した ✓ 重層の「支援会議定例会」で掲載内容を協議し、支援を必要としている人や、今後潜在的に孤独・孤立に陥る可能性がある人に、どのような支援先等があるか、制作過程において庁内で情報を整理できた	

7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列挙

- ・ 今年度制作したカードゲームを活用して、市民向けの孤独・孤立の理解促進イベント(カードゲーム体験イベント)の継続実施、市内の中学校における孤独・孤立の出前講座を予定
- ・ 「つながりづくり」を促進する「空想ファクトリー」及びその SNS・WEB 広告出稿を、今年度の取組結果を踏まえながら毎月継続して実施予定

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

ヒアリングを実施した支援団体から、「自分たちが普段やっていることが孤独・孤立対策だと思っていたが、豊田市が今年度から本格的に孤独・孤立対策に取り組み始めたと聞いて、自分たちの活動が実は豊田市の孤独・孤立対策につながっていると感じた」、「豊田市でゼロから孤独・孤立の取り組みが始まったというよりも、豊田市は以前からすでに積極的に地域づくりに取り組んでいる印象がある」等の反響が得られた。

4. 連携PFの行程および実務上の留意点

【PF立ち上げまでの行程】※令和6年度から本格的に孤独・孤立対策を実施

過年度

(イ)準備段階		
H30 年度～	地域の現状把握	■「企業城下町」の豊田市では、単身で転入してきた人が高齢者になったとき、孤独・孤立に陥りやすいという傾向が従前から浮き彫りになっていた

令和6年度

(ア)初期段階		
4月～	主担当部署の設定	■「誰一人取り残さない」を実現するために、「よりそい支援課」が担当課に決定
4月～	担当者の初動	■国の動きと市内事例を情報収集し、「孤独・孤立対策はすべての行政事業に通じる」という視点を発見
(イ)準備段階		
4月～	取組テーマ決定	■「支援」と「予防」の両輪で孤独・孤立対策を推進。 既存事業との重複を避けながら柔軟な方針を展開
8月～	連携PFの企画・設計	■市民参加型の「空想ファクトリー」を豊田市のPFと位置づけ、参加者同士の有機的なつながり重視
8月～	関係団体のリストアップ(庁内)	■特定の課に限定せず、全庁での孤独・孤立対策の意識定着を重視
	関係団体のリストアップ(庁外)	■「つながりづくり」に関わる様々な属性の人々をPFに巻き込む ■多様な市民活動に取り組む民間団体が、「つながりづくり」のキーマン
(ウ)設立段階		
8月～	域内住民・団体への情報発信	■「楽しく自然に知ってもらう」 —カードゲームを活用した孤独・孤立対策の新しい広報手法
8月～	連携PFの運営	■「地域のために何かしたい」と感じている活動者や市民を、今後も積極的に孤独・孤立対策に巻き込んでいく
(エ)自走段階		
今後	地域協議会の設置	■重層の「支援会議定例会」を活用して、地域協議会の役割を果たしていく
	PFの拡大・活性化	■みんなが「当たり前」に、孤独・孤立対策に取り組んでいる状態を目指す

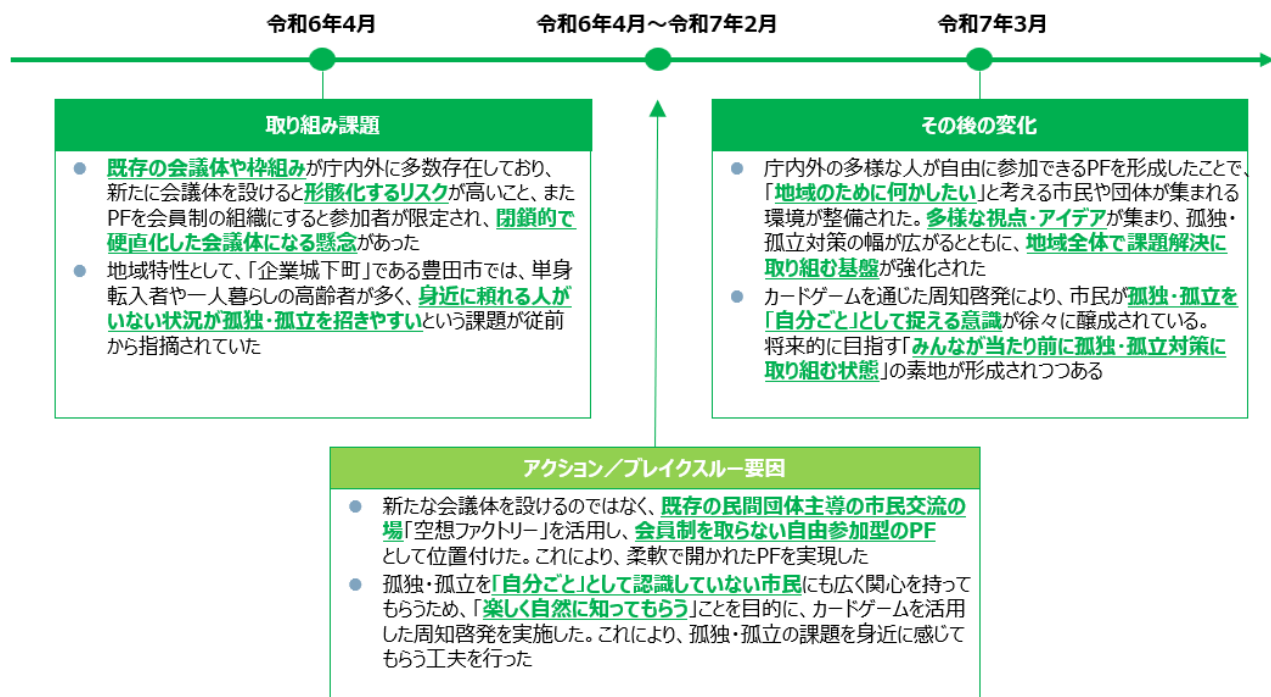
【それぞれの段階での留意点】

(ア)初期段階		
①	主担当部署の設定	■「誰一人取り残さない」を実現するために、「よりそい支援課」が担当課に決定 令和6年4月1日の孤独・孤立対策推進法の施行に合わせ、豊田市としても改めて「孤独・孤立」を1つのテーマとしてとらえ所管課を検討した結果、「誰一人取り残さない施策の総合調整」をミッションとする、よりそい支援課に決定した。
②	担当者の初動	■国の動きと市内事例を情報収集し、 「孤独・孤立対策はすべての行政事業に通じる」という視点を発見 - まずは孤独・孤立に関する国の動きのキャッチアップを行った。また、庁内や市内の民間団体において先進的な孤独・孤立対策の取り組みを行っている事例がないか、情報収集した。 - 孤独・孤立対策を掲げる事例は少なかったが、人やまちをつなげるという意味で、「あらゆる行政事業は孤独・孤立対策に通じている」という考えに至った。
(イ)準備段階		
③	地域の現状把握	■「企業城下町」の豊田市では、単身で転入してきた人が高齢者になったとき、 孤独・孤立に陥りやすいという傾向が従前から浮き彫りになっていた - 平成30年に実施した地域福祉計画策定に際する市民意識調査では、「身近に自分を支えてくれる人がいるか」という意識について調査し、「身寄りを頼ることができない人」に関する問題意識は、庁内で共有されていた。 - 中でも、一人暮らしの高齢者は「支えてくれる身近な人」がいないという点で支援を強化する必要性を感じており、令和元年には「身寄りを頼ることができない方に対する支援のレシピ集」を作成した。
④-1	取組テーマ決定	■「支援」と「予防」の両輪で孤独・孤立対策を推進。 既存事業との重複を避けながら柔軟な方針を展開 - 孤独・孤立に関する取り組みを「支援」と「予防」とに分け、「支援」に資する取り組みは重層事業で、「予防」に資する取り組みは孤独・孤立対策事業として実施する方針とした。 「予防」として特に、庁内外での周知啓発は重層事業では十分ではないため、既存事業との重複を避けながら「支援」と「予防」の両面で、孤独・孤立対策を捉えている。
④-2	連携PFの企画・設計	■市民参加型の「空想ファクトリー」を豊田市のPFと位置づけ、参加者同士の有機的なつながり重視 - 重層事業を含め様々な枠組みで既存の会議体が複数存在している中、PFを新たに設置し会員制をとると、豊田市では形骸化すると考えた。 - 会員制は採用せず、市民が出入り自由で有機的につながることができる「空想ファクトリー」という場を、豊田市の開かれたPFとして位置付けた。
⑤	関係団体のリストアップ 初期メンバーへの声掛け	■特定の課に限定せず、全庁での孤独・孤立対策の意識定着を重視 「あらゆる行政事業は孤独・孤立対策に通じている」という考えから、特定の課との連携をあえて焦点化することはしていない。 - 孤独・孤立対策という観点を広く庁内で周知することで、孤独・孤立対策の観点を意識する課を徐々に増やしていく予定である。
		■「つながりづくり」に関わる様々な属性の人々をPFに巻き込む - PFの参加者の属性を、①地域のつながりづくりに取り組む人、②実際に個別の支援活動を行っている人、③PFのコアメンバー（予防から支援までカバーし行政とも関係が深いメンバー）と幅広く捉え、これらの人々が関わり合うことが豊田市の孤独・孤立対策＝「つながりづくり」につながると考えた。 ■多様な市民活動に取り組む民間団体が、「つながりづくり」のキーマン - 普段から行政と関わりが深い民間団体の中でも、特に福祉サービス以外の領域に取り組んでいる団体がキーマンであり、多様な市民活動を通して「行政では手が届きにくい領域」を推進する民間団体をPFのコアメンバーととらえている。

(ウ) 設立段階		
⑥	域内住民・団体への情報発信	■「楽しく自然に知ってもらう」 ーカードゲームを活用した孤独・孤立対策の新しい広報手法 ・ 孤独・孤立という概念を知らないという人にも知ってもらい、自分や周りの人の困りごとに日常で目を向けてもらうために、「孤独・孤立対策」という言葉を使わずに、「楽しく自然に知ってもらう」ことを重視した。 ・ その手段の一つとして、カードゲームで当事者体験をしてもらうことを企画した。実際に自分や周りの人が孤独・孤立になった時に思い起こしてもらうよう、「つながりの大切さ」や相談できる人や場所が地域にあることを、ゲーム中で印象付ける工夫を行った。
⑦	連携PFの運営	■「地域のために何かしたい」と感じている活動者や市民を、 今後も積極的に孤独・孤立対策に巻き込んでいく ・ PFという場所を通じて、「つながりたい」と思ったときに人や団体とつながってもらうことを目指す。 ・ 今後もPFとしての会議体を設置することはせず、市民同士の勉強・交流の場である「空想ファクトリー」で市民が自由に集まって、地域をよりよくすることを考えてもらう仕掛けを継続する。

(エ) 自走段階		
⑧	地域協議会の設置	■重層の「支援会議定例会」を活用して、地域協議会の役割を果たしていく ・ よりよい支援課を含め、庁内の関係課や支援活動を行う民間団体が多数参加する「支援会議定例会」にて、今後も孤独・孤立を1つの議題として扱い、問題意識を共有していく。 ・ これを通じて、地域協議会としての役割を果たしていく予定である。
⑨	PFの拡大・活性化	■みんなが「当たり前」に、孤独・孤立対策に取り組んでいる状態を目指す ・ 今後もPFの参画者に、普段実施している活動を孤独・孤立対策に結び付けながら推進してもらうことで、地域で活動する人が当たり前日常的に孤独・孤立対策に取り組んでいる状態を目指していく。 ・ 来年度以降は、孤独・孤立の「予備軍」の人に対する支援や予防を目的に、相談窓口に来られない人にも支援が届くような仕組みを進めたいと考えている。例えば、今年度試験的に行ったメタバース空間での交流イベントを、定期的実施することを検討している。

ブレイクスルー要因	
アクション/ ブレイクスルー要因	■既存の場を活用した自由参加型PFの形成とカードゲームによる啓発で、<u>孤独・孤立を「自分ごと」にする意識を醸成</u> ・ 豊田市では、既存の会議体が複数存在することや、地域特性による孤独・孤立の課題が指摘されていた。 ・ そこで、新たな会議体を設けるのではなく、既存の市民交流の場を活用した自由参加型のPFを構築した。さらに、カードゲームを用いた周知啓発により、市民が孤独・孤立を「自分ごと」として捉える意識を醸成した。 ・ その結果、多様な人々が集まりやすい環境が整備され、地域全体で孤独・孤立対策に取り組む基盤が強化されつつある。



コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携PFの重要性～

とよた多世代参加支援プロジェクト

- ・ 「とよた多世代参加支援プロジェクト」は、令和2年4月に設立された任意団体で、豊田市内の約100の支援機関や企業、農家、個人事業主などが参加している。地域の課題を探索し、孤独・孤立を含む多様な困りごとを解決するための「つながり合い」を生み出すことを目的としている。
- ・ 活動としては、困りごとを抱える人と解決したい人をマッチングする活動や、定期的な勉強会、市民・事業所への啓発事業を行っている。また、地域の人々が自由に話し合い、交流できる場「空想ファクトリー」を運営し、地域全体で支え合う「つながり合い」の仕掛けを進めている。

💡「困っている人」・「やりたい人」・「できる人」をつなぐー日常の雑談で得た深いニーズを生かす仕組み

- ・ 地域の困りごとやニーズを解決するためには、「困っている人」・「何かをやりたい人」・「スキルやリソースを提供できる人」をつなぐ仕組みが重要である。これらの人々を結びつけることで、孤独・孤立の解消だけでなく、地域全体の活性化にもつながると考えている。
- ・ 例えば、以前、「子育て支援センター」の運営者から「子育て支援だけでなく、お母さんたちのキャリアアップにつながる活動も合わせてできないだろうか」という「モヤモヤ」の共有があった。これを受けて「モヤモヤ」を共有する機会をつくり、一緒に「モヤモヤ」を整理しながら、それぞれに何ができるかをイメージする場を作り出した事例がある。
- ・ 地域で活動する人々が持つアイデアや課題意識の中には、一人では実現が難しいものもある。とよた多世代参加支援プロジェクトは、そうした思いを受け止め、関係者を集めて意見を出し合いながら、実際の活動へと結びつけている。こうした取り組みは、当事者の希望を実現するだけでなく、地域全体のつながりを強化するきっかけにもなっている。
- ・ また、デイサービス利用者の「普段は家にこもっていることが多いけれど、絵を描くことは好き。自分の絵を展示して、他の人から感想をもらいたい」という声をケアマネージャーが拾い上げ、地域の関係者と協力して実現した事例もある。当事者のニーズを聞き取っても、自分一人では対応できないことや業務範囲を超えることについて、持ち寄れる場が必要である。そのための仕組みとして、とよた多世代参加支援プロジェクトが形成するつながりを生かしてもらい、地域のリソースを最大限活用して実現してもらいたいと考えている。
- ・ そして、こうしたニーズの発見は、日常の雑談や何気ない会話の中から偶発的に生まれることが多い。特に、本人が「困っていない」と感じている場合や、悩みを開示することに抵抗を感じている場合には、雑談を通じて深い部分にある本当の困りごとを探ることが重要である。雑談をきっかけに、当事者の声を丁寧に拾い上げ、それを地域の力で形にしていくプロセスが、孤独・孤立の解消において大きな役割を果たすのではないかと考えている。

💡 行政の枠を超えた柔軟な活動と情報共有の重要性

- ・ 民間団体が多数集まっているとよた多世代参加支援プロジェクトは、行政の制度や管轄の枠組みにとらわれず、地域全体で課題解決に取り組んでいる。とよた多世代参加支援プロジェクトとしてやりたいこと・やろうとしていることが、結果的に、行政が対応しきれない部分を補完する形になることも多い。
- ・ 生活困窮者支援調整会議や重層支援会議に参加する等、行政との情報共有を大切にしながら、民間団体として、行政の枠を飛び越えて柔軟に活動を展開できる強みを生かし、地域の多様な団体や個人と連携することで課題解決に向けた活動を展開している。



特定の人に特定の場や関係性を提供するのではなく、既存の様々な主体が自分たちに出来ることを創造し、人の力を借りながらも実行しあえるように、お互いの顔が見える関係性を構築しようとしているのがこのプロジェクトの特徴です。

とよた多世代参加支援プロジェクト
事務局 栗本浩一様

5.自治体等との打合せ記録一覧				
No.	日時	打合せ相手団体	出席者	
			打合せ相手	NRI
1	7/23(火) 17:30-19:15	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	生駒、橘、小田、 山崎
2	9/5(木) 14:00-15:30	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	生駒、橘、山崎
3	9/30(月) 13:00-14:00	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	生駒、橘、山崎
4	10/24(木) 9:00-9:30	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	生駒、橘、山崎
		豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	
5	10/28(月) 13:00-14:00	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	生駒、橘、山崎
		株式会社カヤック	佐伯様	
6	10/31(木) 11:00-12:30	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様、宮口様、妻木様	生駒、橘、山崎
7	11/28(木) 17:30-18:30	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	生駒、橘、山崎
8	1/16(木) 15:00-15:30	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	生駒、橘、山崎
9	2/5(水) 17:30-18:00	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	山崎
10	2/12(水) 13:00-14:30	豊田市 福祉部 よりそい支援課	畠中様	生駒、山崎

自治体による従前からの取組

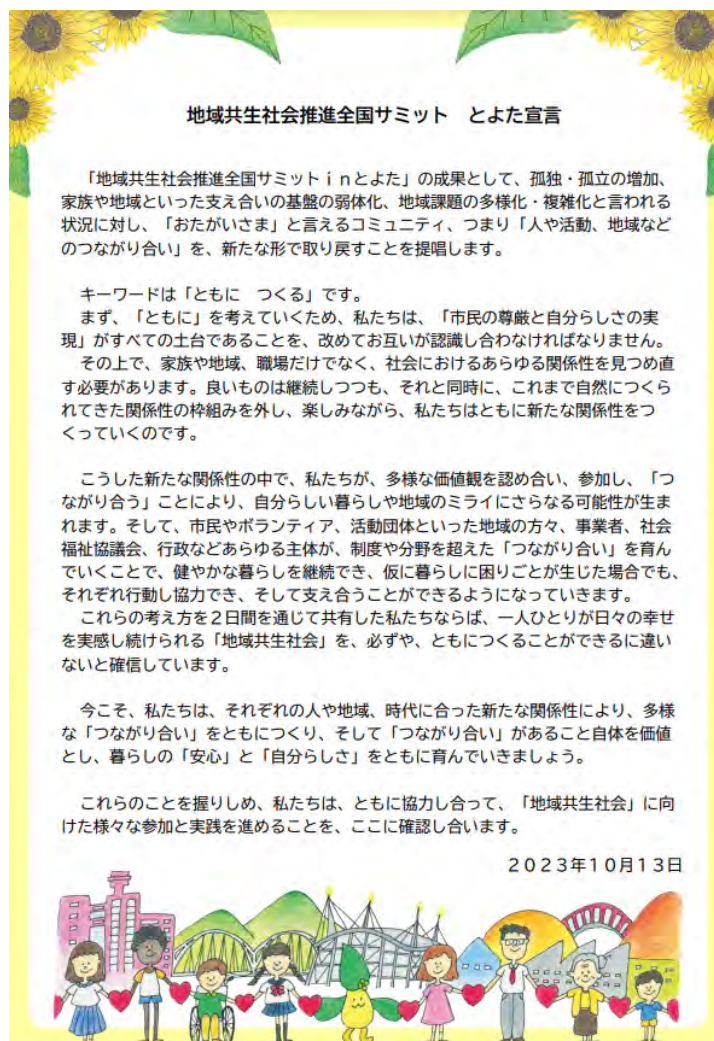
■ 「地域共生社会推進全国サミット とよた宣言」の提唱

(取組概要)

令和5年度に開催された「地域共生社会推進全国サミット in とよた」において、その成果として「地域共生社会推進全国サミット とよた宣言」(以下、「とよた宣言」)を提唱した。とよた宣言は、「地域共生社会の推進に向けた考え」として発信された宣言であり、その中で「孤独・孤立の増加」という地域の状況にも言及している。

孤独・孤立を含む地域課題の打破に向けて、「『おたがいさま』と言えるコミュニティ、つまり「人や活動、地域などのつながり合い」を、新たな形で取り戻すこと」を提唱しており、孤独・孤立対策を含む豊田市の地域づくりの考え方の基礎となっている。

図表 「地域共生社会推進全国サミット とよた宣言」



出所)豊田市 HP「豊田市における地域共生社会を推進する取組について」

■ 「身寄りを頼ることができない方に対する支援のレシピ集」の作成

（取組概要）

「企業城下町」である豊田市には、「身寄りを頼ることができない人」が多い。豊田市ではそうした人々への支援の在り方について検討し、国から出ている「身寄りがない人の入院及び医療に係る意思決定が困難な人への支援に関するガイドライン」や「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」等の既存のガイドラインをもとに、豊田市ならではの地域の情報や、支援のコツ、ノウハウを踏まえて取りまとめた「支援のレシピ集」を作成した。

「支援のレシピ集」は、「身寄りを頼ることができない方に対する支援のレシピ集＜救急搬送編＞」と「身寄りを頼ることができない方に対する支援のレシピ集＜死後事務編＞」の2つからなり、身寄りを頼れない人も、「安心な暮らし」が得られるような地域共生社会を目指すものである。（詳細は、豊田市 HP を参照されたい。）

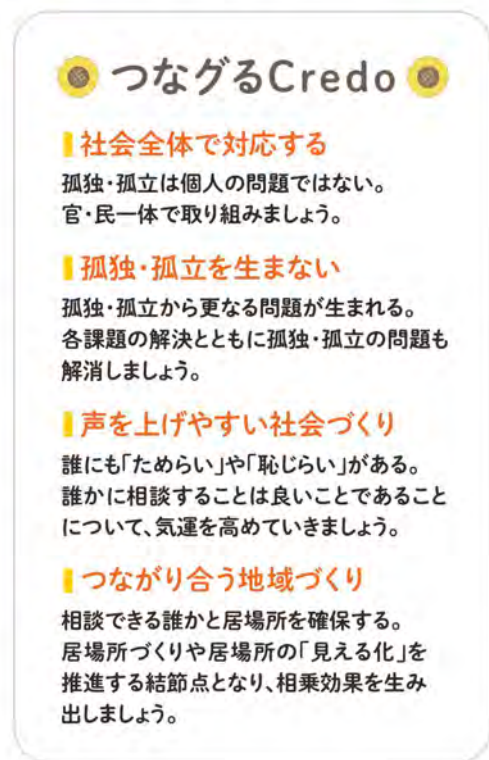
試行的事業	
① 職員の理解促進と庁内連携促進のための広報物作成	
概要	全庁的に各課がそれぞれの取組に孤独・孤立対策の視点を入れて、各自の業務に取り組むことを推進するため、豊田市の孤独・孤立対策基本方針の心構えを記載した「つなぐる Credo」を作成し、全職員に配布した。
ねらい	「つなぐる Credo」の配布にあたっては、ただ広報物を配布するのではなく、庁内の部長会議で、改めて「孤独・孤立とは何か」ということや、豊田市の孤独・孤立対策について説明し、孤独・孤立に関する全職員の基礎的理解を促すことを目指した。
工夫点	普段、「孤独・孤立対策」というテーマを直接的に意識することがないような福祉関係以外の職員にも広く周知するため、手軽に携帯してもらえるようなカードサイズとした。
結果	庁内の部長会議にて趣旨を説明し、全職員 6,200 名に配布・携帯を依頼した。また、多数の職員から「趣旨を理解し、つなぐる Credo を持ち歩いている」という回答を得た。

図表「つなぐる Credo」

表



裏



② 孤独・孤立に関する理解促進ツールの企画・制作	
概要	孤独・孤立に関する理解を促進するためのツールとして、老若男女が楽しみながら孤独・孤立について学ぶことができる「孤独・孤立の当事者体験カードゲーム」(名称:「コドクエ」)を制作した。
ねらい	今後、豊田市で「つながりづくり」に当たり前に取り組んでいる人を増やすため、堅苦しい形ではなく、あくまで「自然に」「楽しく」孤独・孤立を学べるツールとなることを目指した。
工夫点	- ゼロから孤独・孤立のカードゲームを制作するにあたって、関心を持ってくれた市民や地域の関係者を集めた意見交換会・テストプレイを実施し、試作品を都度ブラッシュアップした。 - 親しみを持ってもらえるよう、「豊田市民なら分かる」施設名や地名などのローカルなキーワードを織り交ぜた。
結果	制作を通して豊田市の孤独・孤立の地域課題や、アプローチすべき住民像に関する共通認識が参加者間で醸成され、より豊田市の実情をローカライズしたカードゲームが完成した。

(企画・制作の背景・経緯)

豊田市民に広く孤独・孤立について知ってもらうために、だれでも孤独・孤立の状態になりえる可能性があることや、豊田市に存在する多くの資源を活用して「小さなつながり」を増やすことが大切であることを、「楽しく」市民に知ってもらうことを重視し、その手段として「カードゲーム」を制作・活用することを考案した。

ゼロからの制作にあたっては、シティブロモーションやゲーム制作に専門性を持つ株式会社カヤックと、豊田市での当事者支援団体や地域づくり活動に知見を持つ合同会社なんつなが、「共同制作」という形でタッグを組み、豊田市よりそい支援課と協議しながら、孤独・孤立の当事者体験ができるカードゲームを制作した。

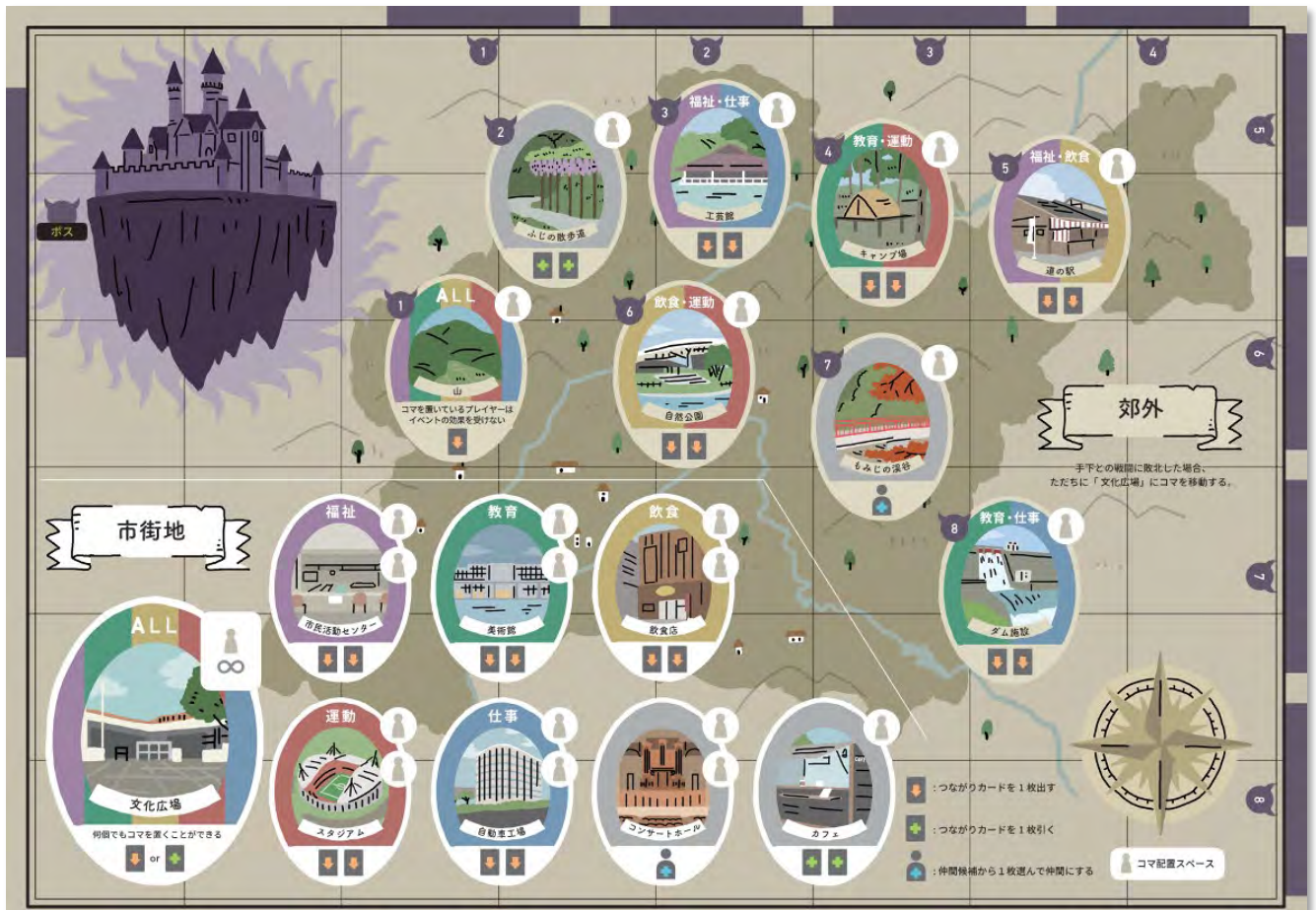
図表 完成した「コドクエ」のあらすじ

プレイヤーは啓示を受けた勇者として、とある異世界の国「トヨターシ」に現れた魔王に立ち向かおうとします。世界が滅びるまではあつとわすか。限られた時間の中で、勇者たちは協力してその大業を成し遂げなければなりません。 しかし、彼らは毎日忙しく仕事に励んで家と会社を往復するだけの日々を送るサラリーマンや、歳をとって家にこもりがちな老人など、他者とのつながりが少ない者ばかり。各個の力では、そのようなことは不可能です。彼らはまず、自分にあったコミュニティなどをつながりをもつことで、仲間を集めなければなりません。 そう、ここは異世界。戦士や射手、僧侶や魔法使いといったスキルをもつ者たちがたくさんいます。彼らと知り合い、魔王を倒すための準備を進めましょう。ただし、降りかかるイベントなどで仲間たちは容易に失われる可能性があります。多くのコミュニティと連携し、自らが孤独にならないように工夫を続けなければなりません。そしてなんと、それは魔王にとっても同じことです。根城にこもる彼らも、プレイヤーが障害を乗り越えるたび、手下を失ったり、健康を損なったりして弱体化していきます。勇者たちは魔王を弱体化させて討伐を成功させ、トヨターシの救世主となることができるでしょうか。	
---	--

図表 完成したカードゲーム

※以降の画像は、本試行的事業後に、豊田市別事業にて「デザイン」を行ったものである。

<勇者たちが移動するマップ>



- 各プレイヤーが仲間を増やしながら「魔王コドーク」を倒しに行く、プレイヤー協力型のゲームとして完成した。マップには豊田市に実在する地名や施設名がちりばめられている。

<主人公カード>







- 各プレイヤーは主人公(勇者)のカードを1枚ずつ保有する。勇者の仲間が増えると、「悩んでいる顔」から「笑顔」のカードに変化し、戦闘力も強力になる。主人公はシニアからヤング世代(学生・青年)まで様々で、属性に応じて性格や能力も異なる。

<コンタクトカード>



- 各主人公(勇者)が、仲間を増やすことができるカード。実際のつながりの形が多様であるように、ゲームでも「SNS 交流」や「工芸体験」など多数の種類が用意されている。

<コミュニティカード>



- 「居酒屋の常連仲間」や「勉強仲間」として、つながりを形成することで、仲間を失うイベント(「転職」などの孤独・孤立に陥りやすいライフイベント等)が発生しても守ることができる。

<完成したゲームの全体像のイメージ>

※本試行的事業終了後に、豊田市別事業にてデザインを実施した状態の全体像イメージ



カードをプレイヤー間で募集したり、譲り合ったりすることができるので、協力して魔王を倒しに行く道のりで自然とプレイヤー間で会話が発生する仕掛けである。

(カードゲームのブラッシュアップの流れ)

まずは地域の福祉関係者へのヒアリングを通して、カードゲームによって市民にどのようなメッセージを伝えていくか整理した。その後、カードゲームの試作品に関する意見交換会やテストプレイを下記の要領で実施した。

図表 意見交換会およびテストプレイの開催概要

カードゲーム制作に関連するイベント	開催概要	
意見交換会 #1	✓ 開催日時	10月26日（土）18時～21時
	✓ 場所	とよた市民活動センター
	✓ 形式	対面
	✓ 開催趣旨	孤独・孤立の定義や、孤独・孤立を感じるとき、または解消する手段などについて、当事者や支援者等と意見交換を行った
	✓ 参加者	20名ほど
意見交換 #2	✓ 開催日時	11月17日（日）18時～20時
	✓ 場所	とよた市民活動センター
	✓ 形式	対面
	✓ 開催趣旨	複数のゲーム企画案をもとに、地域性を中心とした楽しめる要素と、消極的な表現を中心とした排除した方がよい要素等について検討した
	✓ 参加者	20名ほど
テストプレイ	✓ 開催日時	1月23日（木）18時～20時
	✓ 場所	とよた市民活動センター
	✓ 形式	対面
	✓ 開催趣旨	ゲームのラフ案をもとに、孤独・孤立を学ぶためのゲームとしてコンセプトが適切か、想定するプレイヤーにとって難易度が適切か、等について検討した
	✓ 参加者	20名ほど

各会の参加者の属性としては、社会福祉協議会職員などの福祉関係者や、ひきこもり経験者等の当事者、そのほか市民活動に積極的な人、不登校児を持つ親の支援活動をしている人、株式会社カヤックを知っていてゲーム自体に興味を持ってくれた人等、様々なバックグラウンドを持つ人が集まった。

参加者からは、「プレイヤー同士で対戦する形よりも、協力して魔王を倒しに行くことで、プレイヤー同士のつながりづくりになる」や「仲間がいないと魔王たちに勝てない難易度が、自然と孤独からの脱却につながる」といったゲームのコンセプトや難易度などに関する意見から、「途中で仲間を失う展開は寂しさを感じるが、孤独・孤立の当事者体験にはなる」、「豊田市を舞台にしていることがもっとわかる方がよい」などの、孤独・孤立の理解を促すツール・身近な人と楽しみながら学ぶためのゲームとして改善すべき点が挙がった。こうした市民の「生の声」を適宜カードゲームに反映させ、より豊田市の実情や市民の感覚に寄り添ったゲームとなるよう、繰り返しブラッシュアップを図った。

③ 孤独・孤立に関する理解促進イベントの開催	
概要	完成したカードゲームを活用して、①職員向け研修での周知啓発、②市民向けの孤独・孤立に関する理解促進イベントを開催した。
ねらい	カードゲームをきっかけとして、まずは孤独・孤立について認知してもらい、「自分の普段の活動や行動が、実は孤独・孤立対策・つながりづくりにつながっている」という気付きを得てもらうことを目指した
工夫点	ゲーム中にプレイヤー同士で持ち札をやり取りする展開などを通して、知らない人とも自然と会話し、ゲームへの参加自体が小さなつながりの形成につながるよう設計した
結果	①には約 30 名、②には 19 名の市民が参加した。 ②の参加者の約78%が「ゲームでのつながりづくりの体験を通して、つながり方の理解ができた」と回答した。

①職員向け研修での周知啓発、②市民向けの孤独・孤立に関する理解促進イベントでは、多数の職員・市民がカードゲームを楽しむ様子が見られ、ゲーム中の会話などから「つながり」や「コミュニティ」の大切さを感じている様子、また仲間を失って「孤独」を実体験する様子が多くなってきた。

また、今後もカードゲームを用いた中長期の普及啓発活動を計画しており、来年度以降も市民向け体験イベント、中学校への出前講座などのイベントを開催する予定である。カードゲームというツールを活用して、普段の生活で孤独・孤立を意識して、豊田市でつながりづくりに取り組む人を徐々に増やしていきたいと考えている。

図表 職員向け研修・市民向けの孤独・孤立に関する理解促進イベントの開催概要

イベント	開催概要	
職員向け研修	✓ 開催日時	2月27日（木）15時～17時
	✓ 場所	豊田市役所 西庁舎 地下食堂
	✓ 形式	対面
	✓ 参加者	30名ほど
市民向けの 孤独・孤立に関する理 解促進イベント	✓ 開催日時	2月27日（木）18時～20時
	✓ 場所	豊田市役所 西庁舎 地下食堂
	✓ 形式	対面
	✓ 参加者	19名

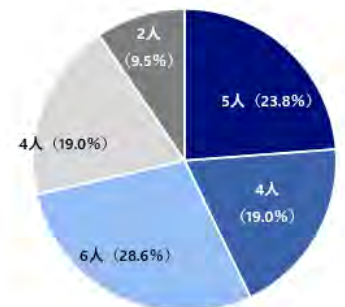
図表 イベント当日の様子



図表 参加者アンケートの結果(※一部抜粋。なお、グラフから回答人数 0 人の項目は除いている。)

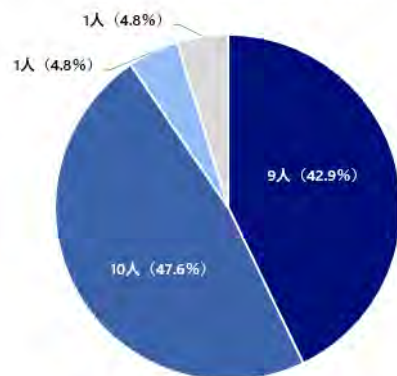
<職員向け研修でのアンケート結果>

質問 5 孤独孤立の体験ができましたか * 複数回答可
(N=21)



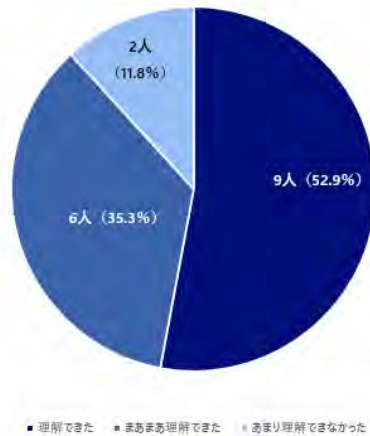
- 自分が寂しい、辛いと感じた
- 他のプレイヤーを救いそう、辛そうと感じた
- 寂しさや辛さを感じなかったが、孤独孤立について理解が深んだ
- 寂しさや辛さを感じなかった
- わからない

質問 6 ゲーム体験を通して、孤独・孤立の解消を体験できましたか? * 複数回答可 (N=21)



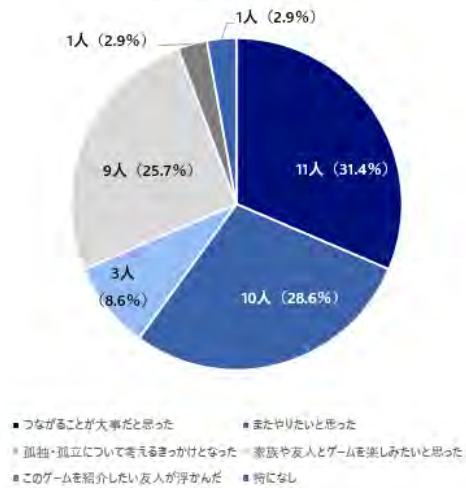
- 仲間がいると寂しさが解消された
- 仲間がいる他のプレイヤーは、寂しくないように見えた
- 孤独・孤立の解消を感じなかった
- わからない

質問7 ゲームでのつながりづくりの体験を通して、つながり方の理解ができましたか？ (N=17)



質問8 「ゲーム体験」をして感じたこと、気づいたことなど

* 複数回答可 (N=35)



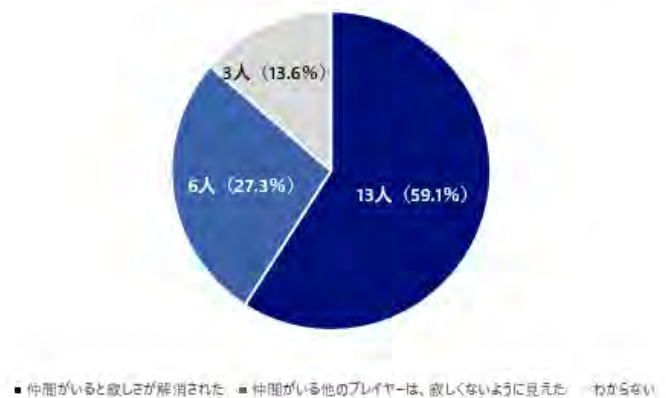
<市民向けアンケートの集計結果>

質問3 孤独孤立の体験ができましたか？ * 複数回答可

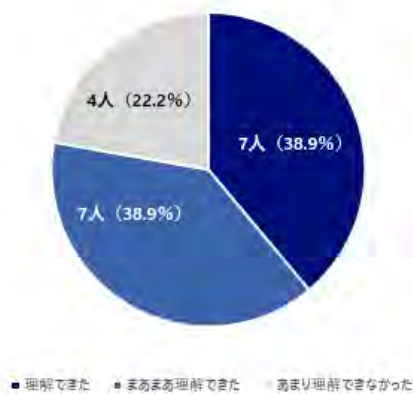
(N=19)



質問4 ゲーム体験を通して、孤独・孤立の解消を体験できましたか？ * 複数回答可 (N=22)



質問5 ゲームでのつながりづくりの体験を通して、つながり方の理解ができましたか？ (N=18)



質問6 「ゲーム体験」をして感じたこと、気づいたことなど * 複数回答可 (N=27)



図表 参加者アンケートで挙げた感想

イベント	参加者アンケートで寄せられた感想（一部抜粋）
職員向け研修	• 誰かがいることの心強さを感じた。誰でも楽しめる楽しいものだった • 小中学生のこともとやると、盛り上がるし学びの一助となると感じた。 • 仲間が守れた時にうれしかった。初めて会った人と仲良くなれた • 少しルールが難しい部分があったのでこどもがやるならもう少しわかりやすいと思った • シニア世代とプレイしてみたい。いろいろなコミュニティがあると知るきっかけとなった • はじめましての人が仲良くなるのによいと思った（プレイ時間はかかるけど） • ゲーム説明時のマニュアルがあるとよい。イベントによる仲間を失う経験が少なく、ゲームがうまい人ほど、孤立への理解は難しい。
市民向けの 孤独・孤立に関する理解促進 イベント	• コミュニティの大切さを感じました • 前回と違って協力プレイになったことで、カードをあげたり、プレイヤー同士で交流できたのが良かった。 • 回数を重ねないとこのゲームの本質には近づかないと思った • 孤独、孤立に誰もなりうるということ、つながりを作ることの心強さ、若い世代に楽しみながら感じてほしいので、中学校や高校の授業で取り入れてほしい。 • 難易度が調節できるのが、いいところだと思いました。 • ゲーム参加者と協力してクリアしていくことで、つながりの大切さがわかった。 • 前回の先行会にも参加をしたが、1ターン目はやはり難しいと思いました。私自身、この会を通じて知り合いができてとても嬉しく思っています。このゲームが知り合いだけでなく、見知らぬ誰かとプレイできる場があれば居場所の1つになるのではないかと思います。 • 一緒にやっているチームの1人が孤独になったりした時に、『孤独を感じた』というアクションというか孤独を目立たせる何かがあると、もっと孤独に注目がいくのかなと思います。孤独になったメンバーがいた時に、メンバーの孤独感をチームで一緒に感じられたら良いのかなと思います。

④「豊田市デイズ」への記事広告出稿	
概要	豊田市で普及している雑誌「豊田市デイズ」に、豊田市の孤独・孤立対策や福祉施策に関する記事広告を4ページ出稿し、掲載ページを抜き刷りして設置・配布した。
ねらい	孤独・孤立について学べるカードゲームの存在や、市民同士の交流・学び合いの場である「空想ファクトリー」について周知することで、「楽しくつながる」ことを印象付けることを目指した。
工夫点	市内の支援・相談機関の情報などを充実させつつ、「どんな困りごとであっても、まずは相談してほしい」という豊田市のメッセージを端的に伝えることを意識した。
結果	孤独・孤立対策を含む豊田市の福祉政策全般について、改めて情報を整理した。その結果、「重層的支援体制事業」やその他福祉制度・サービスのような、一般の市民向けの説明が難しい行政の取り組みについて、わかりやすく言語化することができた。

主に下記の内容を掲載し、一般の市民向けに、豊田市の取り組みやビジョンをわかりやすく発信した。

特に重層的支援体制事業などの既存の福祉制度について、記事という形でアウトプットすることで、豊田市の制度やサービスの情報を棚卸し、対外発信する際の材料としても今後活用できるような形にすることができた。今回の制作において言語化した内容を、市民への説明や庁内での共通認識を深める際にも引き続き活用していく予定である。

図表 掲載概要

主題	概要
①豊田市が目指す地域共生社会のビジョン	✓ 豊田市が「安心して自分らしく暮らせる、支え合いのまち」を目指し、地域共生型社会システムの構築に取り組んでいること ✓ 「重層的支援体制」を整備し、多様化する市民の困りごとに対応する包括的なサポートシステムを構築していること ✓ 各地域に相談窓口を設置し、どの窓口でも適切な支援につながる仕組みを提供していること
②相談窓口の役割と具体的な支援窓口の紹介	✓ つながりを作る＝「つなぐる」を合言葉に、どんな困りごとにも身近な相談窓口にまずは相談してほしいということ ✓ 相談窓口の機能、利用することのメリット、早期の相談の重要性 ✓ その他、悩みの種類に応じた相談窓口のリストを具体的に掲載
③「楽しみながら」つながりを築くためのイベントやツール	✓ 仮定の豊田市を舞台に孤独・孤立の当事者意識を体感しながら、つながりの大切さを楽しく学んでもらうボードゲームの存在。今後の展開予定 ✓ つながりづくりを促すイベントである「空想ファクトリー」の紹介

図表 実際に「豊田市デイズ」に掲載された記事(4 ページ)

豊田市が目指す地域共生

不安や悩みを相談できる 暮らしの安心を支える窓口

地域と連携した多角的な支援で暮らしをサポートする仕組みを整えている豊田市。
悩みや不安を抱えた人に、そっと寄り添う心強いセーフティネットだ。
豊田市は「安心して自分らしく暮らせる。支え合いのまち」を目指して、
地域共生型社会システムの構築に取り組んでいる。

重層的支援体制

多様化する社会のニーズに応え、市民が直面するさまざまな困りごとや課題に対応するため、行政・地域・福祉団体などが一体となって設計された包括的なサポートシステム。どこに相談しても支援につながる包括的な相談窓口を各地域に設置している。

**相談内容に応じて
多機関連携で対応**

進学や就職、引っ越し、育児、介護など、環境やライフスタイルが変わったときは、誰しも孤独とした不安を覚えるものだ。家族や、友人といった近い人には言いにくい悩みを一人で抱えることもあるだろう。自分の悩みだけではなく、「近所の人が困っている様子で気がかりだけれど、声をかけていいものなのか判断がつかない」といった経験がある人も多いのではないだろうか。

あらゆる人に起こり得る「孤独、孤立」対策のために、豊田市は2024年4月に「より強い支援策」を策定した。同策では、多様化する市民の困りごとに対応するための総合的なサポートシステムとして、行政内外の機関、福祉団体、地域コミュニティなどと連携し、どの窓口を訪れても適切な支援につながる「一元的な包括的支援体制」を構築。各地域に相談窓口を設置し、属性や世代を問わず気軽にアクセスできる体制を整備した。年間300件を超える相談が寄せられ、確実的なサポートや地域でのつながりの創出も育めた具体的支援へと導いてきた。

⑤孤独・孤立に関する普及啓発チラシ配布	
概要	市民向けの周知啓発として、孤独・孤立に係る悩みに応じた豊田市内の相談機関を一覧化したチラシを作成した。
ねらい	重層の「支援会議定例会」等で協議・情報を整理し、現在支援を必要としている人や、潜在的に支援が要になる可能性がある人に、適切な支援先や相談窓口をわかりやすく周知することを目指した。
工夫点	市民向けの広報物であること、そして孤独や孤立に悩む人が気軽に手に取れることを大切に考え、「温かさ」や「親しみやすさ」を感じられるデザインに仕上げた。
結果	重層の「支援会議定例会」参加団体や市内の支援機関等の協力を得て、2箇所に各100部を設置・配布した。引き続き、個人宅への訪問事業と連携した配布を調整予定。

チラシの読者の対象については、特定の対象に絞らず、様々なバックグラウンドや悩みごとを抱える人を対象とした。また、悩みごとや困りごとの種類に応じて、適切な相談先をたどることができるよう、分類項目を示しながら相談先へと誘導する構成とした。

図表 制作したチラシ

孤独・孤立は誰にでも起こり得ます。
ためらわずに相談してください。

チラシに関するお問い合わせ：豊田市よりい支援課 電話 34-6791

相談先一覧 (多くの相談機関があるため、ここには一部を掲載しています。)				
大分類	小分類	相談先	とき	電話番号
自分や 身近な人、 相談先が わからない人	相談先がわからない 場合の相談	豊田市政府 よりい支援課	平日 8:30～17:15	34-6791
	生活上の悩み相談 (人権・税・ 相続・年金等)	豊田市政府 市民相談課	月曜日 13:00～16:00 (1時間単位) 金曜日 9:00～12:00 (1時間単位) ※要予約 (元家庭裁判所調停委員)	34-6626
	女性のための電話 相談室クローバー コール	火・水・金・土曜日 10:00～16:00 水曜日 10:00～13:00・ 16:00～19:00 ※直接相談有(要予約)	33-9680	
	男性のための電話 相談室メンズコール とよた	毎月第2、第4金曜日 18:00～20:00	37-0034	
子どものいる家庭や 子ども、子育てに 関する悩みがある人	子どものいる家庭 に関する相談	豊田市政府 子ども相談室	平日 9:00～17:15 ※家庭児童相談室	34-6965
	ひきこもりや不登校 に関する相談	こども・若者総合 相談センター RePPO-りっぽ	火～土曜日 9:00～18:00 ※要予約、小学生から39歳まで	33-1533
	不登校、いじめ、発達 などの相談	青少年相談センター パルクとよた	月～土曜日 9:00～17:00 ※要予約、小学生から19歳未満の 青少年及びその保護者・家族	33-9955
	心の病気や 障がいに関する 悩みがある人、 またはその家族	豊田市政府 保健支援課	平日 8:30～17:15 ※保健課 ※要所は要予約 ※精神科医 ※要予約 ※心理職員 (個別面談) ※要予約	34-6855
障がいに関する相談	障がいに関する相談	豊田市障がい者 相談支援事業所	原則平日 8:30～17:15 ※事業所により異なるため、障がい 福祉課に確認	34-6751 障がい福祉課
	お金や就労に 関することで 悩みがある人	豊田市 社会福祉協議会	火～土曜日 8:30～17:15	34-1132
	就労に関する相談	豊田市 就労支援室	月3回 14:00～16:50 ※要予約	31-1330
	高齢者の介護に 関する悩みがある人	高齢者や介護 に関する相談	豊田市地域包括 支援センター	地域包括支援センターごとに異なる ため、高齢福祉課に確認
生きがいや趣味の 活動をしている人	市民活動 に関する相談	とよた市民活動 センター	月・水～日曜日 10:00～18:00	36-1730
	ボランティア活動 に関する相談	豊田市 社会福祉協議会	火～土曜日 8:30～17:15	31-1294

2-5. 播磨町

No.	5	播磨町
-----	---	-----

1. 取組の全体像						
1. 自治体の概要						
①	自治体名	播磨町		②	担当部局名	福祉保険部 健康福祉課
③	人口	33,604(人)＜令和2年10月/国勢調査＞				
④	自治体内連携	庁内連携部局(メイン)		こども課、保険課、協働推進課(まちづくりアドバイザー)		
			庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・アウトリーチ型相談支援体制構築の検討 ・孤独・孤立対策の具体的施策を立案実施		
		庁内連携部局(メンバー)		庁内全ての部局(企画課、危機管理課、総務課、税務課、債権管理課、協働推進課、産業環境課、住民課、保険課、健康福祉課、こども課、都市計画課、営繕課、土木課、上下水道課、教育委員会教育総務課、教育委員会地域学校教育課、議会事務局、会計室)		
			庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・孤独・孤立の情報共有をするとともに、連携して施策を実施する		
2. 形成をめざす地方版連携PFの姿						
①	従前の取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	- 総合相談窓口の設置 - 自殺防止対策PFの立ち上げと運営 - 高齢者、子ども、障がい者等の各福祉部門についての支援計画を策定				
②	実現したい状態 ※構築する仕組み/支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール		- PF立ち上げの事前準備として、PF参画団体を募るとともに、PF参画候補団体へ孤独・孤立問題についての学ぶ機会を設ける - 全庁で連携した孤独・孤立対策に向けた、庁内連携作り		
		最終的なゴール		社会的孤立をはじめとして、生きる上での困難・生きづらさのあるすべての町民を支援できる体制		

3. 地方版連携PFにおける連携体制			
①	地方版連携PF (種類があれば)	立ち上げ年度	令和7年度(予定)
		参画メンバー(予定)	兵庫県精神保健福祉センター、兵庫県中央こども家庭センター、加古川健康福祉事務所、加古川公共職業安定所、加古川警察署、加古川消防本部、加古川医師会、播磨町教育委員会、播磨町社会福祉協議会、播磨町民生委員児童委員協議会、播磨町地域包括支援センター、播磨町地域自立支援協議会、播磨町自治会連合会、播磨町商工会、労働基準監督署、播磨町内の賛同企業、町内の支援団体、文化・スポーツ団体、町内の居場所、訪問看護連絡会、精神科病院、播磨町成年後見センター
		選出・打診時の工夫	自殺防止対策PF参画団体を選出する。また、居場所づくり等孤独・孤立への支援を意欲的に行う活動団体も新たに選出・打診する。新規選出にあたっては、庁内の部課長級へのアンケート調査により、各部署から提案してもらった。
②	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	立ち上げ年度	令和6年度
		参画メンバー	支援の対象となる者の生活実態等に応じて、支援に関係する機関及び団体、支援に関係する職務に従事する者、その他担当部長が必要と認める者
		選出・打診時の工夫	協議会は、必要な時に必要な支援者が集えるように、参画メンバーの固定はしていないが、主に保健師、基幹相談支援センター、社会福祉協議会、地域包括支援センター等が協議会の中心となる。
4. PF連携による価値や工夫_考え方			
- 福祉以外の分野の団体も多数参画している自殺防止対策PFの目的に孤独・孤立対策を加えて改称することで、既存のコミュニティを生かしつつ、よりアクティブに活動を行う場として、孤独・孤立対策官民連携PFを立ち上げる。 - PFでは、町からのインプットや協力依頼だけでなく、参画メンバーの課題感やニーズを適宜調査することで、双方向に連携しながら孤独・孤立対策を実施する。			

5. 連携PFのイメージ図



3. 試行的事業一覧					
6. 本年度に取り組む試行的事業の概要					
試行的事業のポイント・工夫		・ 生きづらさを感じるすべての町民を支援できる体制を構築する。 ・ 当事者支援と予防の観点から町民への周知啓発を行う。			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
①	地域協議会の設置	・ 播磨町孤独・孤立対策個別支援協議会(地域協議会)を令和6年9月1日付で設置し、孤独・孤立問題の具体的なケースについて議論を行った。	・ 孤独・孤立に関する具体的なケースについて構成機関等と連携し、切れ目のない支援を提供すること。	9月1日付	— 費用なし
			成果検証結果 ✓ 12月27日(金)に第1回地域協議会を開催し、社会福祉協議会や地区担当保健師、相談支援事業所、障害サービス事業所、精神科病院等が一同に会してケースの検討を行った。 ✓ 第1回地域協議会での検討結果を受けて、精神科病院と保健師が連携し、保健師が退院者へ訪問支援を実施した。		
②	住民向け広報	・ 孤独・孤立問題やそれに対する町の取組、相談窓口について、チラシ及び町 HP にて町民に向けて広報した。	・ 孤独・孤立問題の現状と、それに向けて町が取組もうとしていることを町民に広く周知すること。	10月17日(木)納品 10月24日(木)全戸配布	・ 作成：14万円 ニュー★ハリマ ・ 配送：1万円 加古郡広域シルバー人材センター
			成果検証結果 ✓ 町内 12,978 世帯に全戸配布を行った。チラシを見て相談窓口を訪れるケースがある等、支援につながった。 ✓ 福祉会館や中央公民館、図書館等の公共施設でも配布を行ったほか、各種イベントでも配布を行った。		
③	精神科病院との連携	・ 近隣4つの精神科病院と担当保健師等との情報連携体制を構築し、精神科病院退院者を町で受け入れる体制を作った。	・ 精神科病院退院者を町で受け入れる体制を構築し、退院後の孤独・孤立を予防すること。	10月～	費用なし
			成果検証結果 ✓ 12月27日(金)に第1回地域協議会を開催して1件のケースについて議論を行った結果、精神科病院と保健師が連携し、保健師が退院者へ訪問支援を実施した。		

④	PF立ち上げ事前研修(部課長級向け)	・ 庁内部長級・課長級及び主要な関係機関に対し、孤独・孤立問題の概要及び町の今後の取組について周知し、庁内が一体となって取組む体制を作った。 ・ 事前研修後には、研修講師である大西参与と播磨町長、播磨町福祉保険部、播磨町社会福祉協議会、播磨町で孤独孤立対策に取組む民間企業とで意見交換会を実施し、今後の取組や連携について確認した。 ・ 後日、本研修のフィードバック会を実施し、大西参与と担当部署、関心の強い庁内課長補佐級以上の職員とで、PFと各部課との関わり方や具体的な取組について対話した。	・ 庁内及び関係機関の孤独・孤立問題についての理解を深め、孤独・孤立対策への連携体制を築くこと。 ・ 孤独・孤立問題に対する町の方針性を庁内で共有すること。	・ 庁内研修 11月18日(月) ・ フィードバック会 12月16日(月)	5万円+交通費 認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長 大西様
			成果検証結果	✓ 事前研修には町長、副町長を含む総勢 64 名が、フィードバック会には孤独・孤立対策に強く関心を持った 24 名の課長補佐級以上の職員が出席した。 ✓ アンケートによると、本研修を受け、半数以上の部課長級が、PFを自身の部署で活用できると感じた。 ✓ 本研修に出席した別部署の課長の発案で、庁内職員に対して孤独・孤立対策を呼び掛ける庁内放送が実施されたほか、職員研修において孤独・孤立対策について職員に広く呼びかけられたり、本研修のフィードバック会や若手職員向け研修(試行的事業⑨)が実現したり、別部署の事業において孤独・孤立対策PR動画が放映されたりした。	

⑤	PF立ち上げ事前研修(若手・中堅職員向け)	来年度以降の孤独・孤立対策部会を主に担っていく全庁の若手・中堅職員に対し、孤独・孤立問題の概要及び町の今後の取組について周知した。	- 庁内の孤独・孤立問題についての理解を深め、孤独・孤立対策への連携体制を築くこと。 - 孤独・孤立問題に対する町の方針性を庁内関連部署間で共有すること。	3月4日(火)、5日(水)	8万円+交通費 認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長 大西様
			成果検証結果	✓ 全庁の若手・中堅職員67人が出席した。 ✓ 受講後アンケートによると、本研修を受けた職員の約92%が、孤独・孤立問題とその支援への理解が深まったと回答した。 ✓ 孤独・孤立問題を福祉分野の問題として捉えるのではなく、自分ごととして全庁で取組んでいくべき問題であるという理解を促進できた。 ✓ 他課の職員から自分の担当課でできそうな取組案を提案してもらうグループワークにより、外からの視点や発想を活かした取組検討が行われた。	
⑥	中学3年生に対する「社会保障を学ぶ授業」	町内の中学校2校の中学3年生に対して、孤独・孤立にならないため、さらには孤独・孤立した際に頼るための社会の仕組みについて授業した。	- 大人になって困ってからではなく、子どものうちに社会の仕組みを学ぶことで、将来的な孤独・孤立を予防すること。 - 万一孤独・孤立した際の援助希求力を高めること。	3月7日(金)	6万円+交通費 NPO 法人 Social Change Agency 代表理事 横山様
			成果検証結果	✓ 播磨町の中学3年生305人が本授業を受けた。 ✓ 授業後アンケートによると、高額療養費制度は86.9%、民生委員児童委員は約92.6%、認知度が向上した。 ✓ 困ったときに助けてくれる社会保障制度があることや、困ったときは一人で抱え込まずに役所等に相談することが大事であることを広く周知できた。 ✓ 授業を受けた生徒が、授業内容を親に伝え、後日親子で総合相談窓口で就労相談で来所した。 ✓ 中学校長から、来年度以降も継続して本授業を実施してほしいという要望を受ける等、学校側にも本授	

			業が好評であり、学校との継続した連携体制構築につながった。		
①	支援者向けシンポジウムの開催	- 孤独・孤立対策官民連携PFの前身である自殺防止対策PF参画団体及び今後孤独・孤立対策官民連携PFに参画してもらいたい団体等に対してシンポジウムを開催した。 - 孤独・孤立問題とその支援に関する基調講演と、播磨町長や播磨町ふるさとPR大使、民生委員児童委員、播磨町で孤独・孤立対策に取り組む民間企業や支援団体によるパネルディスカッションを行った。 - 来場できなかった支援者や住民にも孤独・孤立対策とその支援について周知啓発をするため、町公式YouTube 配信を行った。	- 既存の自殺防止対策PF参画団体及び孤独・孤立の支援者に対し、孤独・孤立支援について学ぶ機会を作り、より効果的な支援を実現すること。 - 孤独・孤立対策官民連携PFへ参画してもらうこと。	1月18日 (土)	149 万円 神戸新聞事業者
			成果検証結果	✓ 総勢 123 名が来場した。 ✓ アンケートによると、来場者の 91% が孤独・孤立問題とその支援への理解が深まったと回答した。 ✓ アンケートによると、来場者の 69% がPFへの参画に関心を示した。 ✓ アンケートから、子どもの居場所をはじめとした居場所づくりや防災等のテーマをPFで取り扱ってほしいというニーズが明らかになり、今後のPF立ち上げ計画に反映していく。 ✓ 今回のシンポジウム及び交流会を受けて、支援者同士でつながりができたという声があがった。	

②	居場所マップ・動画の作成	町民の居場所を紹介する居場所マップを作成して町民へ配布するとともに、既存の居場所を紹介する長尺動画と播磨町の窓口やつながりのあたたかさを端的に伝える短尺動画を作成して町公式YouTube、公共施設等で配信した。	- 孤独・孤立を予防し、かつ孤独・孤立した人を支える場でもある「居場所」について町民に広く周知すること。 - 町内の居場所を増やすこと。	- 動画:12月27日(金)納品 - マップ:2月17日(月)納品 2月24日(月)全戸配布	- 作成:187万円 合同会社Roof - 配送:2万円 加古郡広域シルバー人材センター
			成果検証結果	✓ マップは全戸配布や公的機関、居場所にて計 14,550 枚配布した。 ✓ 既存の居場所からは、引きこもりになっていた方等がマップを見たことをきっかけに通ってくれるようになった等、居場所に足を運ぶ人が増えたと報告された。 ✓ 住民からも、マップを見て居場所に通い始めた、マップがなかったら通おうと思わなかったのとても有難い、といった声があがった。 ✓ 支援者からは、居場所の具体的なイメージを伝えやすくなった、居場所を紹介しやすくなった、といった声があがった。 ✓ 令和7年4月より、新たに居場所1つが開設されることとなった。	
③	支援体制の可視化	支援体制(相談・会議体)のあり方を整理、課題を抽出し、孤独・孤立対策官民連携PFの体制を検討した。	既存の支援体制を過不足なく孤独・孤立対策に巻き込み、新規体制も立ち上げ、漏れなく支援できる体制を築くこと。	7月～12月	費用なし
			成果検証結果	✓ 既存の支援体制として5つの会議体を孤独・孤立対策として組み込んだ。 ✓ 既存の支援体制から零れ落ちるケースを受け止める会議体として、地域協議会を立ち上げた。	

7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列举

- ・ 孤独・孤立対策の周知啓発を継続する。
- ・ PFのあり方について、試行的事業の全庁への事前研修や支援者向けシンポジウムでの意見を踏まえ、播磨町に合った形で、令和7年度にPFを立ち上げる。
- ・ 各年度のテーマ(課題)を設定し、PFの集いを毎年1回実施する。
- ・ 試行的事業を評価した上で、中学3年生に対する授業を毎年実施する。
- ・ 社会福祉協議会と連携をしながら、町内の居場所の増加を図る。
- ・ 地域の団体等からの情報をもとに、支援が必要な対象者に対し保健師等がアウトリーチを行い、必要な人は居場所等へつなぐ。

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

- ・ 包括連携協定を締結している民間企業から、共に孤独・孤立対策に取り組んでいけたらという意思表示をいただいた。

4. 連携PFの行程および実務上の留意点

【PF立ち上げまでの行程】※令和6年度から孤独・孤立対策を実施

過年度

	(ア)初期段階	
R3・R4	地域の現状把握	■地域福祉計画策定時にアンケート調査を実施し、実態やニーズの把握をした

今年度

R6	(ア)初期段階	
7月	主担当部署の設定	■保健師が所属しており、かつアウトリーチ型相談支援体制のあり方検討会議の担当課3課を主担当部署とした
7月～	担当者の初動	■内閣府職員による資料や講演会等のYouTubeを活用して、孤独・孤立問題への理解を深めた
	(イ)準備段階	
7月	取組テーマの設定	■特定の分野に限定せず、「誰ひとり取り残されないまち」をテーマとした
7月～		■既存の自殺防止対策PFの目的に孤独・孤立対策を加えて拡充することで、孤独・孤立対策官民連携PFを立ち上げることとした
7月～	連携PFの企画・設計	■関係のある複数課が主担当となり、かつその統括を担当課共通の部長が担ったことで、関係部署が自分事として捉えつつ、連携もスムーズに進んだ
10月～		■意見はできる限り実現する方向で調整を実施したことで、様々なアイデアが集まりやすくなった
10月～	初期メンバーへの声掛け(庁内)	■孤独・孤立は福祉分野だけの問題ではないため、全庁一体となって取り組むものとした
10月～	関係団体のリストアップ(庁外)	■全庁に孤独・孤立問題についての研修を実施した際に、PFに入ってほしい団体を調査し、各部署のコンネクションや知見を活かしたりリストアップを行った
	(ウ)設立段階	
10月～	域内住民・団体への情報発信	■孤独・孤立問題とそれに対する町の取組を周知するチラシを配布した
2月～		■町内にある居場所により訪問しやすくなるよう、マップを作成して配布するとともに、様子を紹介する動画を作成して様々な媒体・場所で流した
今後	連携PFの運営	■PFではインプットとアウトプットの双方を行いつつ、PFであげられた提案を担当部署につないで実現させることを検討している
	(エ)自走段階	
9月	地域協議会の設置	■複数分野に跨ったケース等、個別協議会から零れ落ちるケースの受け皿として位置付け、「誰ひとり取り残されないまち」を実現する
今後	PFの拡大・活性化	■参画団体の手間を省き、かつ主体性を尊重するため、新規参画にあたって申込等の手続きを簡略化する

【それぞれの段階での留意点】

(ア) 初期段階		
①	主担当部署の設定	■保健師が所属しており、かつアウトリーチ型相談支援体制のあり方検討会議の担当課3課を主担当部署とした 令和5年度から、保健師が所属している3課合同で保健師のアウトリーチについて検討していた。アウトリーチ型相談支援体制は孤独・孤立支援とも通じるため、この3課合同で孤独・孤立対策にも取り組むこととした。
②	担当者の初動	■内閣府職員による資料や講演会等の YouTube を活用して、孤独・孤立問題への理解を深めた 内閣府による自治体説明会資料が分かりやすく、適宜参照している。また、YouTube にアップロードされている、孤独・孤立に関する講演会や研修会、対談等の動画を視聴することで、孤独・孤立問題やその支援についての理解を深めた。

(イ) 準備段階		
③	地域の現状把握	■地域福祉計画策定時にアンケート調査を実施し、実態やニーズの把握をした 地域福祉計画や健康増進計画、自殺対策計画等を策定するにあたってアンケート調査を実施し、町内の実態やニーズの把握を行った。孤独・孤立対策を進めることがこれらの計画の推進にもつながるため、各計画のアクションとして孤独・孤立対策を位置づけている。
④-1	取組テーマ決定	■特定の分野に限定せず、「誰ひとり取り残されないまち」をテーマとした 孤独・孤立は様々な課題が複合的に絡み合っているため問題化するため、特定の分野にテーマを絞ることは難しいと考えた。そこで、地域福祉計画のテーマでもあり、町の福祉政策の合言葉でもある「誰ひとり取り残されないまち」をテーマとした。
④-2	連携PFの企画・設計	■既存の自殺防止対策PFの目的に孤独・孤立対策を加えて拡充することで、孤独・孤立対策官民連携PFを立ち上げることとした - 形骸化している自殺防止対策PFを活用して孤独・孤立対策官民連携PFを立ち上げることとした。立ち上げにあたっては、自殺対策連絡協議会での審議を経た後に首長へ話を通すことで、協議会からのハレーションを抑えた。また、自殺防止対策PFを立ち上げた当初の担当職員へPF設立経緯や意義を確認することで、筋の通った拡充となるようにした。 ■関係のある複数課が主担当となり、かつその統括を担当課共通の部長が担ったことで、関係部署が自分事として捉えつつ、連携もスムーズに進んだ - 関係部署が連名で担当課となることで、各課が自分事として考えて取り組むことができた。複数課が絡むため情報連携等にひと手間かかったが、統括が各課共通の部長であったため、合意形成や上長への調整がスムーズに進んだ。 - 情報連携や合意形成等の際は、直接会って話をした。顔の見える関係性を構築することで、意見のすり合わせを行いやすくなった。 ■意見はできる限り実現する方向で調整を実施したことで、様々なアイデアが集まりやすくなった - 職員や支援団体等からあがった意見をできる限り実現するよう柔軟に調整を行った。そのため、様々なアイデアが集まってくるようになり、担当課としてもアイデア発案係と調整係とで分担することができ、負担感も大きくなかった。

⑤	関係団体のリストアップ 初期メンバーへの声掛け	庁内	■<u>孤独・孤立は福祉分野だけの問題ではないため、全庁一体となって取り組むものとした</u> 孤独・孤立に関する研修を、全庁の部課長級及び、今後の孤独・孤立対策部会を担う全庁の若手職員に向けて行い、今後は全庁一体となって取り組む課題であることを周知した。実際に他部署と連携した取組が生まれたり、他部署からも様々な取組案が提案されたりと、部署横断的に連携する環境ができた。
		庁外	■<u>全庁に孤独・孤立問題についての研修を実施した際に、PFに入ってほしい団体を調査し、各部署のコネクションや知見を活かしたりリストアップを行った</u> 全庁に孤独・孤立問題についての研修を実施した際に、研修実施後アンケートにて、PFに入ってほしい団体の調査を行った。その結果、各担当部署のコネクションや知見を活かしたリストアップができた。また、名前があがった団体すべてに声掛けを実施した。

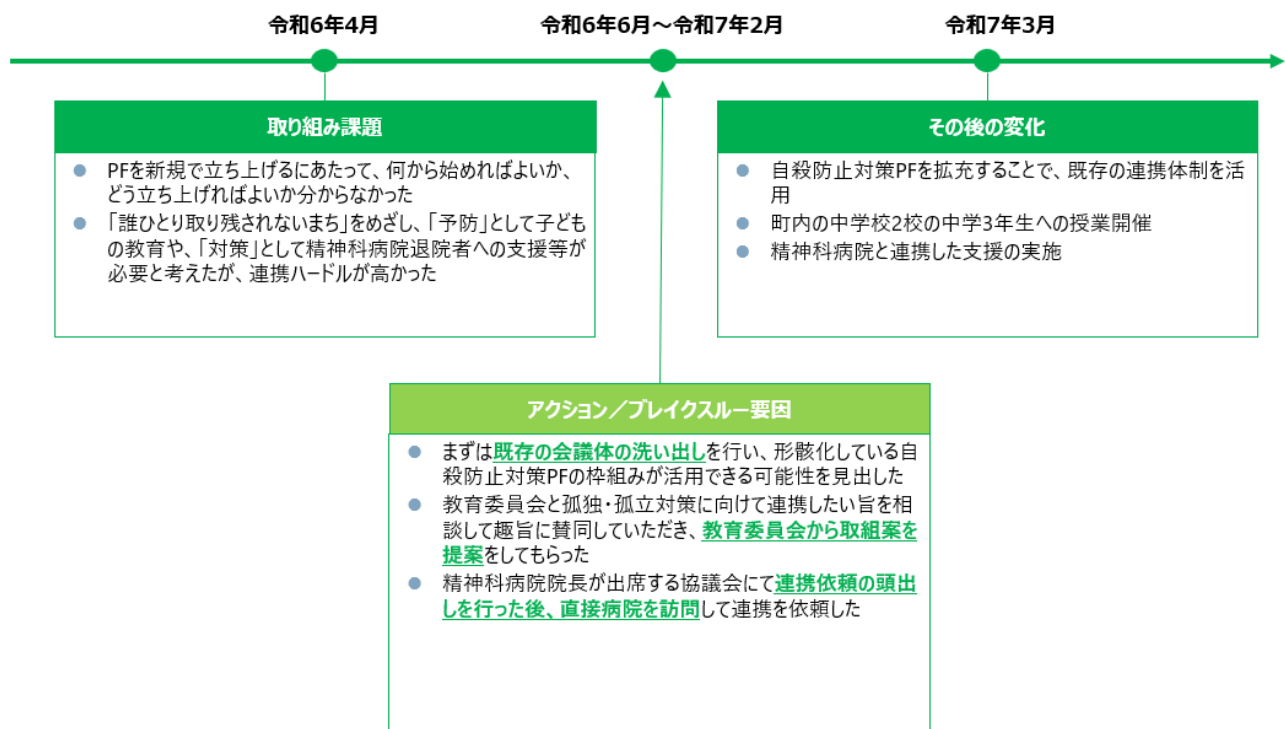
(ウ) 設立段階

⑥	域内住民・団体への情報発信	■<u>孤独・孤立問題とそれに対する町の取組を周知するチラシを配布した</u> - 孤独・孤立が身近な問題であり、その対策として町が取組んでいることや相談窓口が設置されていることを周知するため、チラシを作成して配布した。確実に町民に届くよう、自治会経由で全戸配布を行った。 ■<u>町内にある居場所により訪問しやすくなるよう、マップを作成して配布するとともに、様子を紹介する動画を作成して様々な媒体・場所で流した</u> - 町内にある居場所を周知するマップと動画を作成した。マップには、居場所の写真やメッセージを掲載したり、動画には活気のある様子や利用者のインタビューを掲載したりと、居場所のあたたかさを伝え、町民がより気軽に居場所を訪れることができるようにした。
	⑦ 連携PFの運営	■<u>PFではインプットとアウトプットの双方を行いつつ、PFであげられた提案を担当部署につないで実現させることを検討している</u> 防災等、町民全員が関わり、かつ福祉に限らないテーマを軸に据え、インプットを行いつつ、グループワークを通じて提案をする等のアウトプットも行う。また、出てきた提案は担当部署につないで実現に向けて調整する運営を検討している。

(エ) 自走段階

⑧	地域協議会の設置	■<u>複数分野に跨ったケース等、個別協議会から零れ落ちるケースの受け皿として位置付け、「誰ひとり取り残されないまち」を実現する</u> 受け付けた相談は総合相談窓口が司令塔となって、担当の個別協議会にてケースごとに協議を行う。一方、複数分野に跨ったケースや適切な個別協議会がないケース等、個別協議会のサポートから零れ落ちるケースは地域協議会につなぐことで、すべてのケースを支援できる体制とする。
⑨	PFの拡大・活性化	■<u>参画団体の手間を省き、かつ主体性を尊重するため、新規参画にあたって申込等の手続きを簡略化する</u> PFに参画してほしい団体には、事務局から案内メールを送付し、参画を希望しない団体のみ返事をもらう形式とする。また、新規でPFに参画したい団体は、申し込み手続きでPFに参画することができる。参画団体は連絡先リストの形で把握し、PFの案内等はそのリストの連絡先へ行う。

ブレイクスルー要因	
アクション/ ブレイクスルー要因	■PFをどう立ち上げるか検討するにあたり、まずは既存の会議体を洗い出した 既存の会議体を洗い出すことで、形骸化している自殺防止対策PFを活用した孤独・孤立対策官民連携PF立ち上げへと至った他、既存の会議体を過不足なく孤独・孤立対策に活用しつつ、不足している部分には新規で会議体を設立し、漏れなく支援できる体制を構築した。
	■教育委員会や精神科病院との連携にあたっては、直接依頼をして顔の見える関係性を築くことで、スムーズな調整を実現した メールや電話での依頼ではなく、足を運んで直接依頼や説明をすることで、先方からも趣旨に賛同してもらいやすく、連携もスムーズに進んだ。



コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携PFの重要性～

まちの居場所 はりまある(兵庫県播磨町)

- ・ 福祉会館のフリースペースを活用して、月2回、居場所を開いている。「自分のペースを大切に」を合言葉にしており、ボランティアも参加者も無理をせず、自分のペースで来たり過したりすることができる。基本的にはお茶とケーキを楽しみながらゆっくりと交流する場であるが、参加者の提案でキッチン部やボードゲーム部が設けられ、地域食堂を開いたりゲームをしたり等、思い思いに過ごしている。
- ・ 場所代はかからず、お茶代は参加者から徴収しているため、ほとんど費用をかけずに運営している。
- ・ 居場所オープン当初は代表の友人を呼ぶことから始め、来た人がさらに自分の友人を呼ぶことで広がった。

💡 漏れのない支援のためには、小さな居場所をたくさん作ることが大切。そのために、居場所を作りやすい環境が必要である。

- ・ 様々な居場所をたくさん作ることで、どこかに自分に合う居場所を見つけることができる。たくさんの居場所で細やかな支援のネットを張ることで、漏らすことなく支援することができる。また、スモールスタートができ、かつ同じような居場所がたくさんあれば、支援者も気軽に始めることができ、継続への負担感も少ない。
- ・ 居場所をたくさん作るためには、居場所づくりを行いたい人が気軽に実施できるよう、ノウハウの共有や、お金をあまりかけずに居場所を開けるような環境づくりが大切である。

💡 支援するためには当事者が能動的に動く必要があるため、情報提供が重要である。

- ・ 支援を行うには、まずは居場所に来る、支援を求める等の当事者の能動的なアクションが大切であるため、居場所や支援制度の周知が重要である。また、孤独・孤立が重度化し能動的に動けなくなる前に情報提供することが大切である。

💡 官民の円滑な連携には、顔の見える関係性が重要である。

- ・ 行政職員が実際に居場所へ足を運んでくれたりと、顔の見える関係性があると、支援者としても行政に協力しやすい。また、まちづくりアドバイザーやコーディネーター、有力な支援活動家がPFの運営に係わる等、行政と支援者間のギャップを埋めたり、橋渡しができる人の存在も重要である。



PFではインプットだけでなくアウトプットも行い、一緒に作り上げる感覚があるとよいのではないかと。また、顔の見える関係性をつくることで、官民が円滑に連携することができる。

まちの居場所 はりまある
代表 市川 佳代様

5.自治体等との打合せ記録一覧

No.	日時	打合せ相手団体	出席者 打合せ相手	NRI
1	7/30(火) 15:00-16:45	播磨町 福祉保険部	長谷川様	生駒、橘、小田
		播磨町 福祉保険部 健康福祉課	竹内様、山下様	
		播磨町 福祉保険部 こども課	前川様、西尾様	
		播磨町 福祉保険部 保険課	杉岡様	
		播磨町 総合相談窓口 基幹相談 支援センター	河原様	
		播磨町 まちづくりアドバイザー	佐伯様	
2	9/4(水) 10:00-11:30	播磨町 福祉保険部	長谷川様	橘、小田
		播磨町 福祉保険部 健康福祉課	竹内様、山下様	
		播磨町 福祉保険部 こども課	前川様、西尾様	
		播磨町 福祉保険部 保険課	杉岡様	
		播磨町 総合相談窓口 基幹相談 支援センター	河原様	
		播磨町 まちづくりアドバイザー	佐伯様	
3	10/10(木) 15:30-17:30	播磨町 福祉保険部	長谷川様	生駒、橘、小田
		播磨町 福祉保険部 健康福祉課	竹内様、山下様	
		播磨町 福祉保険部 こども課	前川様、西尾様	
		播磨町 まちづくりアドバイザー	佐伯様	
4	11/18(月) 16:45-17:45	播磨町 福祉保険部	長谷川様	生駒、橘、小田
		播磨町 福祉保険部 健康福祉課	竹内様、山下様、平井様	
		認定 NPO 法人自立生活サポ ートセンター・もやい	大西様	
5	11/19(火) 10:00-11:00	播磨町 福祉保険部	長谷川様	生駒、小田
		播磨町 福祉保険部 健康福祉課	竹内様、山下様、平井様	
		播磨町 福祉保険部 こども課	前川様、西尾様	
		播磨町 福祉保険部 保険課	福島様	
		播磨町 社会福祉協議会	藤田様	
6	12/25(水) 11:00-12:30	播磨町 福祉保険部	長谷川様	橘、小田
		播磨町 福祉保険部 健康福祉課	竹内様、山下様、平井様	
		播磨町 福祉保険部 こども課	前川様、西尾様	
		播磨町 福祉保険部 保険課	杉岡様	
		播磨町 総合相談窓口 基幹相談 支援センター	河原様	
7	1/30(木) 15:00-16:30	播磨町 福祉保険部	長谷川様	橘、小田
		播磨町 福祉保険部 健康福祉課	竹内様、平井様	
		播磨町 福祉保険部 こども課	前川様、西尾様	
		播磨町 福祉保険部 保険課	杉岡様、福島様	
8	2/3(月) 11:00-12:00	播磨町 福祉保険部	長谷川様	橘、小田
		播磨町 福祉保険部 健康福祉課	竹内様、平井様	
		播磨町 福祉保険部 こども課	前川様	
		教育委員会	河合様、川前様	

		NPO 法人 Social Change Agency	横山様	
--	--	--------------------------------	-----	--

自治体による従前からの取組

■ 播磨町自殺防止対策協力連携事業

(取組概要)

すべての命を町が一体となって支えることができるよう、行政のみならず支援団体等が連携して自殺防止対策に取り組む「播磨町自殺防止対策協力連携事業」を令和3年度から実施している。この事業は、「播磨町自殺対策連絡協議会」の提案で始まったものである。警察や消防、医師会、商工会、自治会連合会、教育委員会等、福祉以外の団体も多く参加している。「播磨町自殺対策連絡協議会」が中心となって自殺対策計画の管理や課題の把握等を行い、庁内の自殺防止対策部会やケース検討会議と連携する体制となっている。事業としては、研修会開催や啓発活動等が行われている。

図表 播磨町自殺防止対策協力連携事業のイメージ図

関係機関や団体、地域住民による協働・連携（自殺防止対策協力連携事業）



試行的事業	
① 地域協議会の設置	
概要	播磨町孤独・孤立対策個別支援協議会(地域協議会)を令和6年9月1日付で設置し、孤独・孤立問題の具体的ケースについて議論を行った。
ねらい	子どもや生活困窮者等の個別支援会議からこぼれ落ちるもの等、適切な個別支援会議がないケースも取りこぼすことなく支援をすること。
工夫点	- 町民から相談窓口が分かりやすいよう、一括で「総合相談窓口」が相談を受け付けたいうで各担当者につなぐ体制とした。 - 議論に当たり、協議会メンバー間で各ケースの認識をすり合わせられるよう、アセスメントシートを作成した。 - アセスメントシート作成に当たっては、よく立ち寄る店舗等、その人と地域との関係を可視化できるようにした。
結果	12月27日(金)に第1回地域協議会を開催し、社会福祉協議会や地区担当保健師、相談支援事業所、障害サービス事業所、精神科病院等が一同に会してケースの検討を行った。 - 第1回地域協議会での検討結果を受けて、精神科病院と保健師が連携し、保健師が退院者へ訪問支援を実施した。

適切な個別支援会議がないケースや、複数の個別支援会議に跨っているケース等、個別支援会議のサポートから零れ落ちるケースの受け皿として、地域協議会を設置した。また、各個別支援会議よりさらに孤独・孤立問題に踏み込んで検討を実施する場としても位置付けている。

【播磨町孤独・孤立対策個別支援協議会 開催内容】

◇ 9月1日付 播磨町孤独・孤立対策個別支援協議会 設置

◇ 12月27日(金) 第1回播磨町孤独・孤立対策個別支援協議会開催

出席者:明石土山病院 地域連携室、播磨町社会福祉協議会、播磨町社会福祉協議会(ホームヘルパーステーション)、就労継続支援事業所もりいぶ、相談支援事業所ライズアップ、播磨町 健康福祉課(保健師、基幹相談支援センター、総合相談窓口)

内容:本協議会の趣旨の認識共有、精神科病院退院者の具体的なケースについて検討、今後の支援方針決定

検討にあたっては、アセスメントシートにより、支援対象者がどのように社会と関わっているのかの社会関係図を作成した。

◇ 1月17日(金) 支援対象者と支援者の顔合わせ

出席者:支援対象者、支援者(播磨町社会福祉協議会、相談支援事業所スタートライン、播磨町 健康福祉課(保健師、総合相談窓口))

内容:本人の思いを把握

◇ 2月7日(金) 支援対象者自宅への訪問支援

出席者:支援対象者、支援者(相談支援事業所スタートライン、播磨町 健康福祉課保健師)

内容:困りごと等のヒアリング(今後も経過観察を行う予定)

図表 地域協議会アセスメントシート(抜粋)

●支援対象者・相談者(世帯)の状況(必須)						受付日		年 月 日	
受付機関名						担当者名			
名前	続柄	性別	年齢	職業 学校	同居 有無	医療保険・失業保険・介護認定・障害認定・ 健康状態・就学援助・各種手当受給状況・最終学歴 等			
	本人								
					同・別				
					同・別				
					同・別				
社会関係図(シェアード)									
例)・行きつけのお店 ・民生委員 など									

●日常生活の状況(必須)									
自立	食事	保潔	衣類の着脱	排泄	移動	意思疎通	判断力・記憶	その他	
一部介助									
全介助									
備考 (必要範囲など)									

●支援対象者・相談者(世帯)の家計状況(任意)									
一ヶ月の収入	項目	金額(円)	備考	一日の過ごし方	時間	項目	内容		
	合計	0							
負債の状況				住環境	備考	居住形態	持ち家・賃貸・その他()		
借入先	返済月額(円)	残額(円)	対象者の生活空間						
			お風呂			なし・あり	トイレ	なし・あり	
			空調設備			なし・あり	エレベーター	なし・あり	
合計	0		ペット			なし・あり	()		
資産等の現状				例)・生い立ち など					
預貯金	円								
固定資産	持ち家・車・その他()								
所持金	円								
保険等	生命保険・損害保険・その他()								

② 住民向け広報	
概要	孤独・孤立問題やそれに対する町の取組、相談窓口について、チラシ及び町 HP にて町民に向けて広報した。
ねらい	- 孤独・孤立とはどのような状態で、誰でもなり得る身近な問題であると町民に知ってもらうこと。 - 孤独・孤立を予防し、対策するために町として取組んでいることや相談窓口が用意されていることを町民に知ってもらうこと。
工夫点	- 確実に町民に届くよう、広報誌に折り込んで全戸配布を行ったほか、広報誌が送付されない町民にも届くよう HP にも掲載した。 - 読み手に分かりやすいことを最優先し、窓口はあえて総合相談窓口のみを掲載した。 - 支援のあたたかさを読み手に伝え、切れ目のない支援を実施することが視覚的に分かりやすいよう、手をつないだ支援者の写真や、手をつないだイラストを掲載した。 - 明るい未来に向けたイメージとなるよう、パステルカラー等の明るく柔らかいデザインとした。 - 不登校や若者のひきこり・自殺を予防したいという思いから、若者向けのデザインにした。
結果	- 町内 12,978 世帯に全戸配布を行った。チラシを見て相談窓口を訪れるケースがある等、支援につながった。 - 福祉会館や中央公民館、図書館等の公共施設でも配布を行ったほか、各種イベントでも配布を行った。

図表 住民向け広報チラシ(左:表面/右:裏面)



図表 主な配布場所と配布数

配布・設置先	配布・設置枚数
全戸配布	12,978
播磨町役場	60
福祉会館	30
社会福祉協議会	30
中央公民館	20
コミュニティセンター(4か所)	80
きっずなホール(交流スペース)	20
図書館	20
イベント・研修会(健康イベント、メンタルヘルス研修会等)	200
孤独・孤立対策シンポジウム	140
庁内会議・研修	270
中学3年生に対する「社会保障を学ぶ授業」	350

③ 精神科病院との連携	
概要	近隣4つの精神科病院と担当保健師等との情報連携体制を構築し、精神科病院退院者を町で受け入れる体制を作った。
ねらい	精神科病院の退院者を町で受け入れる体制を構築することで、退院後に孤独・孤立を抱えることなく、安心して生活を送れるようにすること。
工夫点	精神科病院からの理解を得るために、自殺対策連絡協議会・精神保健福祉推進連絡協議会の場で院長や加古川健康福祉事務所に頭出しをしたうえで、実際に病院を訪問して説明を行った。
結果	12月27日(金)に第1回地域協議会を開催して1件のケースについて議論を行った結果、精神科病院と保健師が連携し、保健師が退院者へ訪問支援を実施した。

播磨町は、誰ひとり取り残されないまちをめざしている。昨年度、現時点で支援の輪から零れ落ちる可能性があるケースは何かを部内で議論した結果、精神科病院退院者があがった。精神科病院退院者への支援は、播磨町の孤独・孤立対策における重要課題の1つである。

【各連携先との接触日程】

- ◇ 8月7日(水) 自殺対策連絡協議会・精神保健福祉推進連絡協議会開催
近隣精神科病院の院長のうち1名及び加古川健康福祉事務所が本協議会の委員であったため、協議会で本連携体制について頭出しを行い、事前に理解いただいた。
- ◇ 10月18日(金) 加古川健康福祉事務所、あかし保健所を訪問
内容:加古川健康福祉事務所は以前から精神科病院退院者の地域移行に取り組んでいるため、今後は必要に応じて播磨町と情報連携し、ともに精神科病院退院者の地域移行に向けた支援体制を整えることについて同意を得た。
- ◇ 11月1日(金)、11月11日(月)、11月15日(金) 近隣4つの精神科病院を訪問
内容:支援が必要なケースについて、播磨町と連携していくことの同意を得る。
- ◇ 12月27日(金) 第1回播磨町孤独・孤立対策個別支援協議会開催
出席者:明石土山病院 地域連携室、播磨町社会福祉協議会、播磨町社会福祉協議会(ホームヘルパーステーション)、就労継続支援事業所もりいぶ、相談支援事業所ライズアップ、播磨町 健康福祉課(保健師、基幹相談支援センター、総合相談窓口)
内容:本協議会の趣旨の認識共有、精神科病院退院者の具体的なケースについて検討、今後の支援方針決定
検討にあたっては、アセスメントシートにより、支援対象者がどのように社会と関わっているのかの社会関係図を作成した。
- ◇ 1月17日(金) 支援対象者と支援者の顔合わせ
出席者:支援対象者、支援者(播磨町社会福祉協議会、相談支援事業所スタートライン、播磨町 健康福祉課(保健師、総合相談窓口))
内容:本人の思いを把握
- ◇ 2月7日(金) 支援対象者自宅への訪問支援
出席者:支援対象者、支援者(相談支援事業所スタートライン、播磨町 健康福祉課)
内容:困りごと等のヒアリング(今後も経過観察を行う予定)

④ PF立ち上げ事前研修(部課長級向け)	
概要	・ 庁内部長級・課長級及び主要な関係機関に対し、孤独・孤立問題の概要及び町の今後の取組について周知し、庁内が一体となって取組む体制を作った。 ・ 事前研修後には、研修講師である大西参与と播磨町長、播磨町福祉保険部、播磨町社会福祉協議会、播磨町で孤独孤立対策に取り組む民間企業とで意見交換会を実施し、今後の取組や連携について確認した。 ・ 後日、本研修のフィードバック会を実施し、大西参与と主担当部署、関心の強い庁内課長補佐級以上の職員とで、PFと各部課との関わり方や具体的な取組について対話した。
ねらい	・ 庁内全課及び関係機関に孤独・孤立対策への当事者意識を持ってもらい、町全体で取組む連携体制を構築すること。 ・ 孤独・孤立問題に対する町の方向性を庁内で共有すること。
工夫点	・ 全庁の職員に当事者意識を持ってもらうために、町長にも出席してもらい、町全体で取組んでいく必要があることを話していただいた。 ・ 出席者からの反響を受けて、当初予定していなかったフィードバック会を開催する等、出席者の意向を反映して柔軟に拡充を行った。
結果	・ 事前研修には町長、副町長を含む総勢 64 名が出席した。 ・ フィードバック会には孤独・孤立対策に強く関心を持った 24 名の課長補佐級以上の職員が出席した。 ・ 受講後アンケートによると、本研修を受け、半数以上の部課長級が、PFを自身の部署で活用できると感じた。 ・ 本研修に出席した別部署の課長の発案で、庁内職員に対して孤独・孤立対策を呼び掛ける庁内放送が実施された。また、職員研修においても、孤独・孤立対策について職員に広く呼びかけられた。 ・ 本研修出席者の発案で、本研修のフィードバック会や若手職員向け研修(試行的事業⑨)が実現した。 ・ 本研修に出席した別部署の発案で、男女共同参画推進事業の映画上映会に、孤独・孤立対策のPR動画を放映され、啓発ちらしが配布された。

(事前研修・実施概要)

日時:11月18日(月) 17:50~19:00

場所:播磨町役場

内容:講師による孤独・孤立問題に関する講義、主担当部署から今後の町としての孤独・孤立対策の方向性説明

講師:認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長 大西連さん

出席者:64 名(町長、副町長、全庁の部課長級職員、社会福祉協議会、地域包括支援センター、成年後見センター、孤独・孤立に取り組む民間企業等)

PFを立ち上げるにあたり、そもそも孤独・孤立問題とはどのようなものなのか、それに向けてどのような取組が必要なのかを全庁に周知し、町全体で孤独・孤立対策に取り組むことを目的とし、全庁の部課長級職員をメインターゲットとして、孤独・孤立対策に関する研修を実施した。(出席した民間企業である兵庫ヤクルト販売株式会社はヤクルトの販売を通じて町民と接する機会が多く、アウトリーチ型の支援ができるほか、アウトリーチ型支援がひいてはヤクルト販売員の孤独・孤立予防にもつながると考え、播磨町と連携した孤独・孤立支援を検討している。)

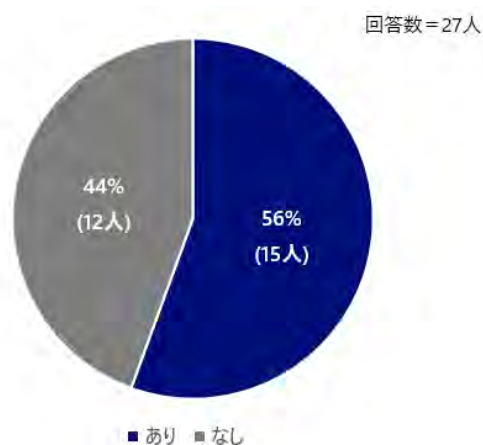
図表 当日の様子



（事前研修・効果検証）

出席者のアンケートでは、係長級以上の職員 27 名から回答を得た。所属部署にてPFを活用できるかについては、約 56%が見込みがあると回答した。具体的な活用方法としては、所属部署の施策や計画に活かすだけでなく、民間企業や自治会、スポーツ団体等の庁外団体への活用も見込めるという回答が多かった。

図表 所属部署にてPFを活用できる見込みの有無



事前研修後には、研修を受けた課長の提案により、庁内に孤独・孤立対策への協力を求める庁内放送が2週間にわたり放送された。また総務課主催の職員研修においても、孤独・孤立対策について職員に広く呼びかけられた。

以下、放送内容。

「播磨町では孤独・孤立対策を推進しています。

国の調査では、20代から50代の働き世代が「孤独を感じることが多い」という結果が出ています。

まずは私達から、「声をあげやすい」「声をかけやすい」温かいつながりのある職場を作っていきましょう。」

(フィードバック会・実施概要)

日時:12月16日(月) 16:00~17:15

場所:播磨町 中央公民館

内容:今後の孤独・孤立対策やPFのあり方についてグループワーク

アドバイザー:認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長 大西連さん

フィードバック会は、事前研修にて孤独・孤立対策に強く関心をもった課長補佐級以上の職員を対象に実施し、PFのあり方や、それぞれの所属部署がPFとどう関わり、どのような孤独・孤立対策ができるかをアドバイザーを交えてグループワーク形式で対話した。

図表 当日の様子



⑤ PF立ち上げ事前研修(若手・中堅職員向け)	
概要	来年度以降の孤独・孤立対策部会を主に担っていく全庁の若手職員に対し、孤独・孤立問題の概要及び町の今後の取組について周知する。
ねらい	・ 庁内の孤独・孤立問題への理解を深め、孤独・孤立対策への連携体制を築くこと。 ・ 町としての孤独・孤立対策の方向性を全庁で共有し、若手職員が孤独・孤立対策部会員として孤独・孤立対策部会を効果的に進めていくこと。
工夫点	・ 福祉分野に限った問題ではなく、全庁として取組む問題であることを周知するため、総務課と担当部署の連名で全庁研修として案内してもらった。 ・ 実際にどのように取組むか検討したり疑問を解消するために、インプットだけでなく、グループワークの時間も設けた。
結果	・ 全庁の若手・中堅職員67人が出席した。 ・ 受講後アンケートによると、本研修を受けた職員の約92%が、孤独・孤立問題とその支援への理解が深まったと回答した。 ・ 孤独・孤立問題を福祉分野の問題として捉えるのではなく、自分ごととして全庁で取組んでいくべき問題であるという理解を促進できた。 ・ 他課の職員から自分の担当課でできそうな取組案を提案してもらったグループワークにより、外からの視点や発想を活かした取組検討が行われた。

(事前研修・実施概要)

日時:第1回 3月4日(火) 14:00~16:00

第2回 3月5日(水) 10:00~12:00

第3回 3月5日(水) 14:00~16:00

場所:播磨町役場

内容:講師による孤独・孤立問題に関する講義、各部署でできそうな孤独・孤立対策について話し合うグループワーク

講師:認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長 大西連さん

出席者:67名(播磨町全庁の若手・中堅職員)

令和7年度立ち上げ予定の播磨町孤独・孤立対策官民連携PFは、播磨町孤独・孤立対策推進委員会、孤独・孤立対策部会がコアメンバーとして牽引していく。この孤独・孤立対策部会は、福祉分野に寄らず、播磨町全庁の若手・中堅職員で構成される。そのため、今後の播磨町の孤独・孤立対策を担っていく全庁の若手・中堅職員に対し、孤独・孤立問題とはどのようなものなのか、それに向けてどのような取組が必要なのか、できるのかを考える研修を実施した。孤独・孤立問題についての講義のあとは、様々な部署の職員で構成されるグループでグループワークを実施した。グループワークでは、グループメンバーの部署でどのような孤独・孤立対策ができそうか、他部署のメンバーから提案を行うことで、外からの視点による新たな発想を活かした孤独・孤立対策の検討を行った。

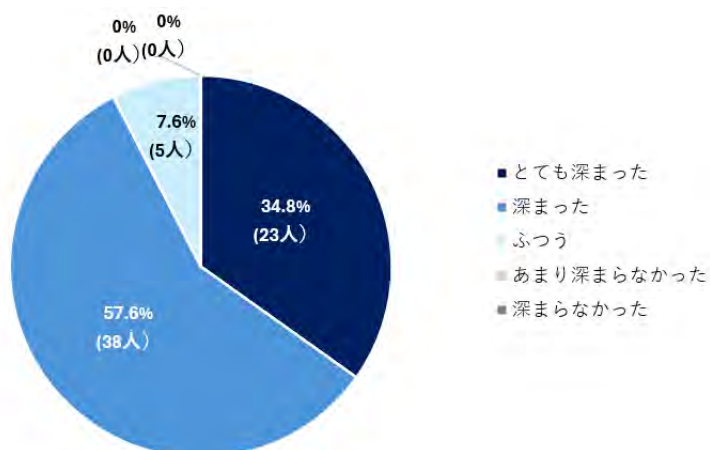
図表 当日の様子



(効果検証)

出席者のアンケートでは、67名から回答を得た。今回の研修により孤独・孤立問題とその支援について理解が深まったかについては、約92%が深まったと回答した。また、研修を受けての感想として「孤独・孤立問題を福祉的な問題として捉えるだけでなく、大きなプロジェクトとして、連携・協働しながら支援、対策を講じていくことが重要であると感じました」「自分に関係ない、他部署のことと思うのではなく、一人の人として行政職員として、当事者意識をもって自分のことととらえることが大事と学びました」の声が上がる等、孤独・孤立問題を福祉分野の問題として捉えるのではなく、自分ごととして全庁で取り組んでいくべき問題であると周知できた。グループワークについても、「自分だけだと思いつかなかった案がたくさん出て面白かったです」といった声が多数あがり、外からの視点や発想を活かした取組検討が行われた。

図表 本研修を受けての孤独・孤立問題・支援への理解



⑥ 中学3年生に対する「社会保障を学ぶ授業」	
概要	町内の中学校2校の中学3年生に対して、孤独・孤立にならないため、さらには孤独・孤立した際に頼るための社会の仕組みについて授業する。
ねらい	- 大人になって実際に孤独・孤立してからではなく、子どものうちに社会の仕組みを学ぶことで、将来的な孤独・孤立を予防すること。 - 万一孤独・孤立した際の援助希求力を高めること。
工夫点	- 教育委員会の理解を得るとともに、内容や運営の打合せに出席してもらう等、連携しながらすすめた。 - 欠席の生徒や多くの住民に授業を聞いてもらうため、授業の様子を町公式YouTubeで配信を行う。
結果	- 播磨町の中学3年生305人が本授業を受けた。 - 授業後アンケートによると、高額療養費制度は86.9%、民生委員児童委員は約92.6%、認知度が向上した。 - 困ったときに助けてくれる社会保障制度があることや、困ったときは一人で抱え込まずに役所等に相談することが大事であることを広く周知できた。 - 授業を受けた生徒が、授業内容を親に伝え、後日親子で総合相談窓口で就労相談で来所した。 - 中学校長から、来年度以降も継続して本授業を実施してほしいという要望を受ける等、学校側にも本授業が好評であり、学校との継続した連携体制構築につながった。

(実施概要)

日時・場所:3月7日(金)

9:45~10:35:播磨中学校

11:45~12:35:播磨南中学校

内容:様々なトラブルが起きたときに活用できる社会保障制度や相談窓口を伝える授業

基調講演講師:NPO 法人 Social Change Agency 代表理事 横山北斗さん

対象者:播磨町にある2つの中学校の中学3年生

様々な社会保障制度や相談窓口があっても、知っていなければ活用できないことも多い。また、孤独・孤立を予防するためには、実際に困ってからではなく、事前に社会保障制度や相談窓口があることを知っていることが大切である。そこで、義務教育を終えてこれから社会に出ていく中学3年生へ、どのような社会保障制度があるのかや、様々な相談窓口やサポートしてくれる人が居ることを紹介する授業を行った。

病気になったときや、子育てで困ったとき、生活費に困ったときなど、様々なピンチをケースごとに具体的に紹介し、それぞれのケースで活用できる社会保障制度を紹介した。また、困ったときには行政の総合相談窓口や民生委員・児童委員、社会福祉協議会、医療ソーシャルワーカーなど、相談できる人や場所があることを紹介するとともに、実際に相談を受ける保健師や民生委員・児童委員も登壇し、ひとりで抱え込まずに誰かに相談してほしいことを訴えた。

図表 当日の様子

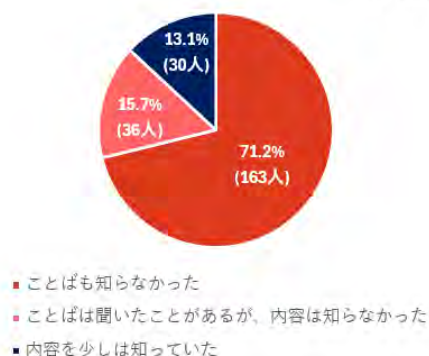


(効果検証)

出席した生徒へのアンケートでは、229名から回答を得た。認知度調査では、「高額療養費制度」は約86.9%、「民生委員児童委員」は約92.6%の生徒が、本日の授業を受けるまでことばや内容を知らなかったと回答しており、社会保障制度や支援者、相談窓口について大きく認知度を向上することができた。また、「自分が大変な状況にある時に、しっかりと助けてくれる制度があるのはすごいなと思ったし、自分がもし大変な状況に陥ってしまったときに自分にあった制度は使いたいなと思いました」や「役場に行って話を聞いたりカウンセラーの人にどんな社会保障があるのか、どんなことをしてくれるのかを一人で溜め込まずに人に聞いたりすることが大切だと思いました」等の感想が多くあり、社会保障制度を知ることによって将来的な孤独・孤立を予防したり、困ったときに助けを求める力を高めることにつながった。

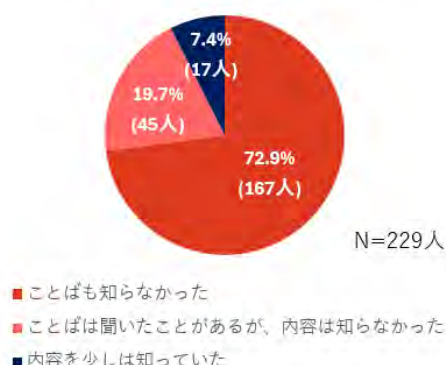
図表 授業前の「高額療養費制度」の認知度

Q1.本日の授業を受ける前、あなたは「高額療養費制度」をどの程度知っていましたか。 N=229人



図表 授業前の「民生委員児童委員」の認知度

Q5.本日の授業を受ける前、あなたは「民生委員児童委員」をどの程度知っていましたか。 N=229人



図表 授業の感想(一部抜粋)

自分が大変な状況にある時に、しっかりと助けてくれる制度があるのはすごいなと思ったし、自分がもし大変な状況に陥ってしまったときに自分にあった制度は使いたいなと思いました
知識がないと損したり困るのは自分なのでしっかり知識をつけて、困ったときは相談していこうと思いました
知らないより、知っているということがすごく大切だなと思いました。これからもし自分に何かが起こったとしても自分は一人じゃなく、必ず誰かが助けてくれるということを忘れずにいたいと思いました
社会保障のことを知っておくことで、もしものことがあったときに少しでも自分の負担を軽くできる可能性が高まることを知った
ピンチになったときは一人で悩まず、役場や社会福祉協議会の総合相談窓口などに相談しようと思いました
役場に行って話を聞いたりカウンセラーの人にどんな社会保障があるのか、どんなことをしてくれるのかを一人で溜め込まずに人に聞いたりすることが大切だと思いました
もし困っている友達や知り合いがいたら一緒に社会保障のことを調べて自分の知識を増やしていくと共にたくさんの人を助けていきたいです
自分がおとなになったとき仕事がなくなってしまうときなどに役場に相談に行きたいし、身近に困っている人がいたら「こんなところがあるよ」と教えてあげたいです
今日の講演がなければ知り得なかった言葉がたくさんあり、とても学びになりました。こういった機会を学生のうちから知ることによって、人生の道も大きく変わってくるのかなと思います
今回の授業を受ける機会がないと知らなかったから、とてもありがたいなと思いました

⑦ 支援者向けシンポジウムの開催	
概要	- 孤独・孤立対策官民連携PFの前身である自殺防止対策PF参画団体及び今後孤独・孤立対策官民連携PFに参画してもらいたい団体等に対してシンポジウムを開催した。 - 孤独・孤立問題とその支援に関する基調講演と、播磨町長や播磨町ふるさとPR大使、民生委員児童委員、播磨町で孤独・孤立対策に取り組む民間企業や支援団体によるパネルディスカッションを行った。 - 来場できなかった支援者や住民にも孤独・孤立対策とその支援について周知啓発をするため、町公式 YouTube で配信を行った。
ねらい	- 既存の自殺防止対策PF参画団体及び孤独・孤立の支援者が孤独・孤立支援について改めて学ぶ機会を作り、より効果的な支援を実現すること。 - より多くの支援団体がPFに参画すること。
工夫点	- 福祉に偏らずに孤独・孤立問題を議論できるよう、播磨町長やふるさとPR大使にも登壇いただいた。 - 幅広い視点から対談できるよう、登壇者の年齢やジェンダーに偏りがないようにした。 - 来場者の多くがPF参画団体であるため、PFへのニーズを調査した。 - 長すぎず短すぎない時間設定となるように意識し、登壇者にも時間設定を事前に周知することで議論が発散しすぎないようにした。 - 来場者からの提案を受けて、交流会を開催する等、柔軟に拡充を行った。
結果	- 総勢 123 名が来場した。 - アンケートによると、来場者の 91%が孤独・孤立問題とその支援への理解が深まったと回答した。 - アンケートによると、来場者の 69%がPFへの参画に関心を示した。 - アンケートから、子どもの居場所をはじめとした居場所づくりや防災等のテーマをPFで取り扱ってほしいというニーズが明らかになり、今後のPF立ち上げ計画に反映していく。 - 今回のシンポジウム及び交流会を受けて、支援者同士でつながりができたという声があがった。

(実施概要)

日時:1月18日(土) 13:30~16:00

場所:播磨町中央公民館 大ホール

内容:孤独・孤立問題やそれに対する支援に関する基調講演及びパネルディスカッション、ふるさとPR大使による播磨音頭の演奏、登壇者と支援者との交流会

基調講演講師:認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長 大西連さん

パネルディスカッション登壇者:認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長 大西連さん、兵庫ヤクルト販売株式会社代表取締役社長 阿部恭大さん、播磨町民生委員・児童委員協議会副会長 衣笠誠一郎さん、まちの居場所はりまある代表 市川佳代さん、播磨町「ふるさとPR大使」岡部祐希さん、播磨町長 佐伯謙作さん

図表 案内ちらし



図表 立て看板



図表 シンポジウムの様子



町内の支援者に対して案内ちらしを配布することにより出席を呼びかけたところ、合計 123 名の支援者に出席いただいた。パネルディスカッションの登壇者は、民間企業(兵庫ヤクルト販売株式会社)やふるさとPR大使等、福祉分野以外の方も呼び出したほか、20~60代の各年代から登壇し、ジェンダーバランスも考慮する等、出来る限り偏りがなく幅広い意見をうかがえる場となるように工夫した。ふるさとPR大使による地元民謡の演奏により、場内の一体感を感じられる工夫も行った。シンポジウム後は登壇者との交流会を実施し、支援団体と登壇者や支援者同士がゆるく対話できる場を設けた。

図表 ふるさとPR大使による民謡演奏



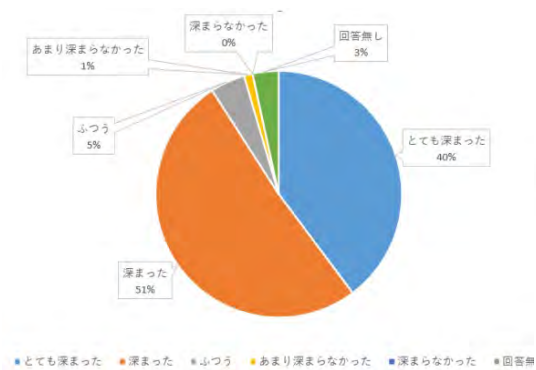
図表 交流会の様子



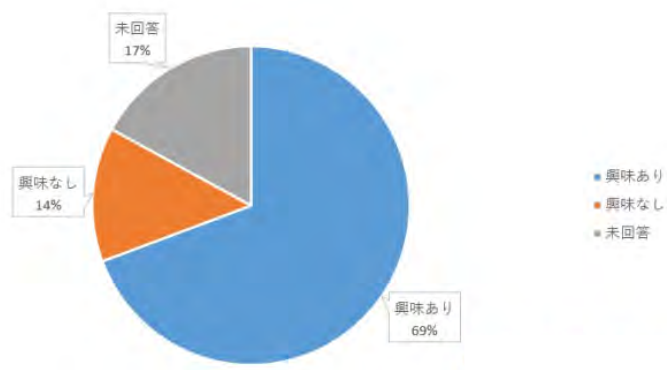
(効果検証)

来場者のアンケートには 85 名が回答した。回答者のうち 91%が孤独・孤立問題とその支援についての理解が深まったと回答した。また、回答者のうち 69%が孤独・孤立対策官民連携PFへの参画に興味があると回答した。PFで取り扱ってほしいテーマとしては、子どもの居場所をはじめ、居場所づくりのニーズが高かったほか、防災対策のニーズも高かった。

図表 孤独・孤立問題と支援への理解度



図表 孤独・孤立対策官民連携PFへの参画意欲



図表 マップ②(一部抜粋)



図表 マップの配布場所と配布枚数

配布・設置先	配布・設置枚数
全戸配布	12,990
播磨町役場	60
福祉会館	30
社会福祉協議会	30
中央公民館	20
コミュニティセンター(4か所)	80
きつずなホール(交流スペース)	20
図書館	20
各居場所	500
庁内会議・研修	300
ケアマネージャー等支援者	500

図表 動画のイメージ(長尺・一部切り抜き)



図表 動画のイメージ(短尺・一部切り抜き)



⑨ 支援体制の可視化	
概要	既存の支援体制(相談・会議体)のあり方を整理、課題を抽出し、孤独・孤立対策官民連携PFの体制を検討した。
ねらい	- 既存の支援体制を過不足なく孤独・孤立対策に巻き込み、活用すること。 - 既存の支援体制では支援しきれなかった部分に新規の支援体制を立ち上げることで、漏れなく支援できる体制を構築すること。
工夫点	- PFのイメージ図は同心円状とし、コアメンバーである孤独・孤立対策推進委員会が中心となるようにした。また、より町民に近い場所で直接支援を行う団体がより上の配置となるようにした。 - 町民の各属性と、個別支援会議が対応していることが分かるように記載した。 - 個別支援会議の隙間から零れ落ちるケースを受け止める体制として、個別支援協議会(地域協議会)を位置づけた。
結果	- 既存の支援体制として5つの会議体を孤独・孤立対策として組み込んだ。 - 既存の支援体制から零れ落ちるケースを受け止める会議体として、地域協議会を立ち上げた。

【支援体制可視化にあたっての意見】

◇ 9月4日のお打ち合わせでの意見

- ・三角形または同心円状により、町民に近ければ近いほど支援の裾野が広がっていくことを示す。
- ・町民から遠い方に支援会議、近い方に市民団体を置き、町民のより近くで支援を行う団体が町民の近くとなるイメージ図を描く。

◇ 10月10日のお打ち合わせでの意見

- ・PFは同心円状のイメージ図を採用し、コア部分にPFの中心メンバーである推進委員会を置く。
- ・PFの内部は、町民をより直接的に支援する団体や居場所づくり・地域づくりを行う予防的な団体を上へ位置付ける。
- ・各種個別支援会議から零れ落ちるケースをすべて受け止める会議体として地域協議会が設置されていることが伝わるイメージ図を描く。
- ・各種協議会は、熱心に孤独・孤立問題を検討しており、かつ協議会メンバーがPFメンバーを兼ねることも多いことから、PFの周辺に位置づける。

図表 可視化した支援体制

